
魔術医師 ジーク

ゆりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術医師 ジーク

【Zコード】

N7367N

【作者名】

ゆりか

【あらすじ】

はるか昔、人が皆魔法を使えた時代

南の大陸では魔大戦が勃発

これは魔術医師ジークの奮闘を描いた書き物である

プロローグ（前書き）

不適切な発言が多数あります
が容赦下さい。
よろしくお願いします。

主な登場人物

ジーク…主人公 オータム…助手 ロス…ジークの弟

その他の魔術医師…ザックス、ガラ、バラ、モズ、イリア

その他の助手…アリー、リース、サリー

弟子…サシャ…ン、チャ、サシャ

プロローグ

「イク先生…ジーク先生！」

助手の声にジークはハツと目覚めた。

「つるさいな！寝させてくれよ…！」

「ダメですよ！15分だけって言つたでしょ…！また、患者の列ができるでありますよ！」

「もーいいよ！みんな死ね！死ねばいいんだ！」

「あなた…医者でしょ！医者がそんなこと言つなー！」

助手のオータムから強烈なビンタが飛んだ。

「な…殴つたな…この俺を…！1日21時間休み無しで働いているこの俺を…！」

「あなただけじゃありません！助手の私たちだつて休みなしじゃないですか！」

「嘘つけ！お前たち助手は3人いて1か月に1日休んでんじゃねーか！しかも1日18時間だし…！俺が知らないと思つたら大間違いだぞ！」

「医師があなた以外みんな逃げたんだからしようがないじゃないですか！それにこつちは患者には迷惑かけていません」

「ウウツ…なんでこんなことに…何時になつたら戦争終わるんだー！誰か教えてくれー…！」

「はいはい…もう患者呼びますよ！次の方ー…！」

「ま…待つてくれ…うわー來た…！」

魔術医師ジークの苦闘は続く…

限界の限界の限界を超えて

「せ、先生！クラナック地方で大戦がつて、1500人の患者がこちらに向かつているそうです。」

「…おい！どーすんだよ！？そんなの俺一人どーにかできるわけないだろ！…」

「そんなの…やるしかないじゃないですか！…」

「お前！俺が死ぬわ！…」

その時、ドアが開き患者がなだれ込んできた。

「ええい！やつたるわ！とりあえず重症患者だけ連れてこんかい！」

36時間後：

「次！あと、何人だ！？」

「今500人目です！」

「…まだ500人か！？1200人ぐらいは見ただろ！？」

「いえ！むしろ10人くらいサバよんで500人です。」

「なんなんだー！もう皆死んじゃえばいいじゃん！…なんで戦争なんかするんだー！」

その時、助手から強烈なビンタが飛んで来た。

「被災者たちに向かつてなんてことを言つんだー！」

「な…殴つたな！36時間休みなしで働いているこの俺を…」

「あんたがいなきや皆死ぬんだからしがないじゃない！死んでも働きなさい！…」

72時間後：

「もう嫌だー！…」

ジークは治療中にもかかわらず、突然叫びドアの方に走り出した。それを助手2人（一人は仮眠中）は手慣れた感じで羽交い絞めにした。

「あと300人じゃないですか！？あなたがいなければ死んじゃうんですよ！！」

「もう寝たい！俺は寝たいだけなんだ！なんで俺だけ…なんで俺だけこんなめに！！」

「あなたは魔術医療の大天才だからでしょう！…聞いてください。絶大な魔法力、天才的な判断力、膨大な知識、経験…全てが備わっているあなたしかできないことです。それを誇りに思つて最後までやり遂げなさい！」

「ぬあー！！次のやつはとりあえず一発殴るからなー！次…！」

「次はナーヒちゃん5歳です！」

「があー！大人の男連れてこいやー！」こんな可愛い子殴れるわけないだろうが！！」

「ナーヒちゃん怯えてるじゃないですか！早く魔法をかけなさい！」

96時間後：

「ジーン先生…あと、あと10人です！」

「誰か、誰か俺を殺してくれ！」

助手から鉄拳が飛んで来た。

「しつかりしろー！」

「そいつら、4日前から死んでないんだろ！じゃあもう大丈夫だろ！」

「私たちが魔法で出血を抑えてるからでしょー！ってか知つてるでしょー！あと10人だからこちやこちや言わずに働きなさい。」

「…もう魔法力も氣力も判断力も出てこないよ…本当だよ…誰か助けてよ…」

「しかたない… これはせりたくなかったけど…」「…嫌だ！ それだけはやめてくれ！ ？ いつ嫌だ――」

100時間後

「ジーン先生… 全員終わりました。」

「…」

「先生？… 力尽きて寝てる。… 本当に凄い先生だわ。1500人体
みなく全ての人を救うなんて…」

「そうね… そして私たちも今回もよくなかったわね。まあ寝ましょ
うか。」

「寝かせてくれ――！ もう寝かせてくれ――！」

「ジーン先生、寝ながら治療してやる！」

魔術医師ジーンの苦闘は続く

「次だ！次連れてこい！！」

魔術医師ジークはいつもの通り、乱暴な口調で治療していた。

「次の患者が今日は最後ですよ。ラーマさん女性23歳です。顔を火傷してしまっています。」

そして、患者のラーマが診療室に入ってきた。

初対面で、ジークは瞳がきれいな人だなと思った。

そして火傷を見て、呪文を唱え始めた。

すると皮膚が素早く再生していき、非常にきれいな顔に戻った。

ジークは、そのラーマの顔を見るとドキドキして顔が真っ赤になつた。

ラーマは鏡を見て、涙を流しながら言った。

「ありがとうございます。」

ジークは照れながら言った。

「いや…いや医者として当然のことだよ。と、とにかく明日の最後に診察をもう一回したいんだが構わないかな？」

「は、はい。それはもちろん…しかし、先生はほとんど1回の治療で完治させて2回はなかなかないと伺いました。私はもしかしたら重大な病気なのでしょうか？」

「いや！決してそんなことは…念には念を入れてね。女性の顔は治療し慣れてなくて後で顔に跡でも残つたら大変だしね！あはは…」

「そういうことなんですね。患者の数も相当だと聞いています。それなのにそんな風に細かく気遣つて下さって…尊敬いたします。」

「いやー、医者として当然の責任だよ。」

助手のオータムがこの一連の会話を聞き、笑顔でジーク囁いた。

「堂々と職権乱用するなんていい度胸していますね。」

「な…なにを言つて…といふで君達助手は明日は来なくても大丈夫だよ。」

「えつ！本当にいいんですか！？」

「ああ！本当さ。たまには君たちも外でデートしてくるといい。いい若い女性が青春を無駄にしちゃいかんよ。」

「ありがとうございます！みんなにも伝えますね。」

オータムは嬉しそうに走つて行つた。

ジークはこう考えていた。

・よし、買収成功！これで助手は黙らせた。助手なじじや明日はきついがこれを乗り切れば一人きりでご飯でも…

翌日…

「次の人！入つてきて！…なに！歩けない！？ああもう…」

助手がいないので予定の3分の1もはかどらない。

これはマズイ…ジークは涙目になりながら、治療した患者にオータムを連れてくるよう言つた。

オータムすぐに駆けつけてくれた。そして、ため息をついて言つた。

「なんなんですか！？あなたは！…まあ予想はしていましたけど

…」

「つるさい…つるさい…俺だつて恋ぐらいしたいよ！1日22時間休みなしで患者の命救つてんだ！好きな女どこ飯に行きたいと思うのは罪ですか！？当然の権利だら…」

「はあ…わかりましたよ。診察では私は席を外しますよ。だからそれまではしつかりやって下さいよ…」

「え…本当に！？わかつた！よーしゃつたるでー…！」

それから、2倍くらいの速さで診察を終え、残るはあと一人になつた。

その時、もう一人の助手サリーが走つてきた。

「せ、先生、シグタル平地で合戦があり、100名の患者がこいつに向かっています。」

「そ…そんな…せつかくここまで頑張ったのに…」

オータムがため息をついて言った。

「次！ラーマさん順番変えて申し訳ないけど来てくださいーー！」

「オータム！お前はなんていいやつなんだ…」

「…5分ですよ！男なんだから堂々と交際申し込むならしなさいよ。」

そして、ラーマが入ってきた。

ラーマの顔を見るとそれだけで元気が出た。

「…い…いかん！ここでフランたら絶対あと100人はこなせない…

ジークはそう思い、言葉を押し殺した。

帰り際、ラーマはジークに向かつて言った。

「先生…また時間がある時にご飯でも食べに来ませんか？」

魔術医師ジークはたまには恋もする

やつだ弟子をとり

「弟子欲しいな…」

「ジーン先生…いきなりなんですか？」

「よし！弟子を募集しよう…！」

「また…無駄なことを。」

「無駄なことなんかあるもんか！君らみたいに助手じゃなく俺のような魔術医師を目指す優秀な弟子を育てるぞ…そして…そしてこの地獄から脱出してラーマさんと…」

「…まあやつてみたらいいんじゃないですか？…どうせ無理だと思つけど…」

さつそくジークは広報活動を開始した。

さすがに、伝説の魔術医師と評判が高いだけあって瞬く間に30人、腕利きの魔法使いたちがやつて来た。

「ほりほらほら、集まつて来たでしょーが！さて…早速授業に入る。とは言つても教える時間はまつたくない。私が実際に治療するので、それを見て勉強なさい。」

修行初日

早速、300人ぐらいが立て続けに来て、ジークはどんどん治療を行つていった。

有能な魔法使いでも1日に10回魔法を使えば、足腰が立たなくなる。

それをジークは1日に3,000回唱える。場合によつてはそれ以上…

3人の魔法使いは余りのジークの凄さに圧倒され、別の道を志したようだった。

残り27人…

修行10日目

「オータム… いつの間にか弟子も15人になっているんだが… 僕の
教え方が悪いのかな…」

「いや、テラッサ地方の大合戦で2000人の患者が来たじゃないですか… さ
らに、私が先生のことボボコに殴つたじゃないですか… 終いには、
拘束して無理やり治療させたじゃないですか… 多分その光景を見た
ら誰もやりたくないりますけどね。」

「… 皆！ この一週間に起こつたことはそうあることじゃないぞ！ 1
か月に1回あるかないかだからな。」

ジークのその言葉を聞き、1か月に1回あの地獄があるとわかつた
弟子3人が違う道を志した。

残り12人…

修行1か月目

「君達2人は、1か月間俺によくついてきてくれた。その… この1
か月は特にひどかったんだ。あの後また、でかい合戦が2度あつた
だろ！？ 1か月に3度の大合戦はなかなかないんだ！ 半年に1回あ
るかないかなんだ！」

「ジーク先生… 彼ら疲弊しきつて寝ています。」

「あとは、最終試験を残すのみだな…」

「最終試験？」

「10日後に…その…俺抜きで治療を行う!もちろん通常の日だ。
そこで1日…いや半日になせれば…晴れて一人前の魔術医師の証よ
!」

「…その日はどこに?」

「いや…その…あつ!たまたまその日はラーマさんと食事に行く日
だつた!いやー偶然だけどちょっとこいやなー…あはは…」

「はーあ…」

残り2人

修行1か月と10日

「お帰りなさい…どうでした?患者さんを置いての食事は?」

「…まあ…そう棘ある言ひ方すんなよ。二人は?」

「疲弊しきつてますよ!一人とも限界を超えてよく頑張つてくれま
した。」

「…顔面がボコボコだけど…」

「しほりだしてもらわないと患者の命に関わりますから!」

「…鬼…」

翌日二人に魔術医師認定章を渡した。（魔術医師は実力を認めた弟
子にのみ認定証を渡せる）

二人ともどことなくオータムを恐れていた。（彼女が手を振り上げ
たらビクッと体が反応していた）

その次の日、その一人から旅に出るので探さないでくださいと置手
紙が置いてあつた。

残り1人

修行3カ月目

「アッサムはよく続けてくれているな…お前は最高の弟子だ…」ジークは涙ながらにそう言った。

「せ…先生…もう寝かせてください…ザ…限界です。」

「し…しつかりしろ…寝るとまたオータムにボコボコされるぞ！」

「ひ…ひーいん」

「泣くな！こんな大合戦は中々ないんだ！！4000人の患者は俺も経験したことが…5回しかない。」

「もう限界です！先生！俺を殺してください…！」

「誰が可愛いお前を殺すんだ！お前も恋をすればそんな気はなくなるぞ。生きる希望をなんとか見出すんだ！」

「先生！間もなく患者500人到着します…！」

「もう少し…もう少し休ませてやつてくれ！俺が俺がその分頑張るから…！」

「せ…せんせええ…」

残り一人

修行3カ月と6日目（3520人の治療完了）

「あ…アッサム！頼む！頼むから殺してくれ…もう嫌だ…患者なんか皆死ねばいいんだ…！」

「先生…アッサムはもういません…さすがに限界の限界の限界がきました。あなたが、あれ以上やらせたら精神に異常をきたすと判断

したじやないですか……」

「嘘だ嘘だ嘘だ！アッサム！戻つてきてくれーーーー俺を……俺を殺してくれーーー！」

「ふう……しかたない……あれはやりたくないのだけれど……」

「いやだいやだいやだ！あれだけは勘弁してくれーーーたの……」

残りの人

「どうとう誰もいなくなつちやつたな……」

「ジーク先生……そう肩を落とさないでくださいよ。」

「いや……アッサムといつ最高の弟子に巡り合えたんだから俺は毎い
はないよ。」

「……彼も素晴らしい才能の持ち主でしたね。」

アッサムはその後魔術医師として北の方で活躍することとなる。

魔術医師ジークの苦闘は続く

趣味を見つけよう

「…

「ジーク先生…どうしたんですか？真面目に何か考えているみたいですねけど…」

「いや…どうしたら日常が楽しくなるかって思つて…」

「なんだそんなことが…仕事していくださいよ…」

「毎日が楽しくないのに仕事なんかやる気がするわけないだろ…」

「…じゃあ何か趣味でも見つければいいんじゃないですか？」

「趣味か！それだ！！」

「えっ！私ですか！？」えーーっと…オータム何がある？」

「えっ！私ですか！？」えーーっと…歌が結構好きでよく歌つていま

すけどね。」

「ちょっと歌つてみてよ。」

「えっ！えっ！ななんで私が歌わなくちゃいけないんですか！？」

他の助手たちも聞き耳を立てていたが、この一連の会話を聞き、こちらへ来た。

「私たちもオータムの歌聞きたいなー！」

「えー！何よあなたたちも！？」

患者たちのマドンナであるオータムが歌うと聞き、患者が続々と集まりだした。

「わし達もオータムちゃんの歌声が聞きたいいのー！」

「なんなんですか！？患者さん達まで…」

「ダメなの？」

この無邪気な言葉にオータムはジークを睨みつけたが、

外野が信じられないくらい盛り上がりがついていてもう後には引けなかつた。

「…えーじゃあ歌わせて頂きます。」

外野から歓声が湧き、拍手が起きた。

「レオナルドラックスの『ラブリー・ベイビ』で…ラブリー・ラブリー

「ハグロー ベイビー... ハグロー ラグロー ハグロー ベイビー...」

1

1

「ジーディー」の「ジーディー」

微妙な拍手と歓声が上がった。

ジーク先生 後で絶対殴る

オーダムは心に決めた。

なるほどなー！趣味があると生活の幅が広かるよなー。

魔術医師ジークの苦悩は続く

「どうかしたんですか？何か問題あります？」

「ちょーっとオータムのあの姿を見るとなあ……」

「ジーケ先生、殴りますよ。」

ジーフは歴史を飲む——

卷之三

ある診察中…

卷之三

「……………先生！ 時ど場合もえてぐたわーよー！ 早く呪文唱えないと死にますよーーー！」

またある診察中…

「じつゆーじつゆーがーほしーーい！」

オータムはちらりと一思つてゐる
- いまいちだから辞めてほしいな
かたや他の助手はそ一思つてゐる。

でもなんだかんだ趣味の歌は続いているみたいである。

魔術医師ジークの苦闘は続く…

感動の授与式

「ジーク先生！ イタリー王国からの兵士の方が来て います け ど 一
しましょ うか？」

「適切にあしらってやれよー。」うなづかしいんだから。

「先生の戦場での医療活動を貢献して賞が貰えるらしいですよー。そして来週受取式があるので来てほしいのです。」

「えっ！俺に…そーかー…丁重にもてなしといってくれる？」「

「……かり」「よく『俺は賞なんかに興味ないとか』語りで下をこよ。」

「……ですね！たまにはいいかもしませんね。」

授与式當日

診察所

「つてなんで授与式に診察所で診察してんだけよ！せつかくの俺の晴れ舞台なんだから行かせてくれてもいいだろ！！」
「まあまあ…先生がいないと患者たちが死んでゆきますから。 オータムが代わりに行ってくれてますから」「なんであいつだけ…」

授与式会場

「魔術医師ジーグ代理人才ータム！」

「はい!」

「貴殿は戦場での医療活動といつても、常に表彰する。」

観衆がオータムに向かって満面の拍手をした。

「ありがとうございます。このような賞を頂いてジークも非常に喜んでいることと思います。ここでジークより手紙を預かっているのでこの場で読み上げたいと思います。」

オータムは預かっていた手紙を開き読みだした。

「本日はこのような賞を頂き、非常に光栄です。しかし、私は本来このような賞をもらえる人間ではないのです。私は戦場で患者が多く人が傷ついているにも関わらず、何度も何度も逃げようとしてしまった。治療しても治療してもキリがなく、終わりのないこの地獄に耐えられなかつたのです。しかし、私が今この賞をもらつているのは、ここにいる…オータムと…2人の助手のおかげなのです。彼女たちはこの地獄にもめげることなく、ただひたすら患者のために…いつも笑顔で…時には私を元気づけてくれました。だから、私がこの賞をもらつて嬉しいのは…この助手の3人が表彰されているようで嬉しいのです。本日は本当にありがとうございます。」

オータムの目には涙がたまつていて、声は感動で震えていた。

観衆から改めて満面の拍手が送られ授与式は幕を閉じた。

授与式後診察室にて

オータムは帰るや否やジークに熱いハグをした。

ジークは照れながら言った。

「おっおい！ どうぞーしたー！ 急に…」

「…ありがとうございます。あんな風に思つてくれているなんて…嬉しかった…」

オータムは助手達に手紙を見せた。

すると助手たちもまたジークにハグをした。

ジークは照れながらも心の中では罪悪感でいっぱいだった。

・ラーマさんが来てるって聞いたからどうやってかつこよく見せよ

うかつて一生懸命考えて書いただけなのに…この状況ではとても言
えない…墓場まで持つてこよう…

魔術医師ジークの苦悩は続く

捨てきれない情

「大戦に参加している兵士長が負傷したものを連れてやつて来た。
「うちは兵士はお断りだから！ 辞めてから来てくださいね！！」

「なんど!! 一か二か三か四か!!」

兵士長は声を荒げて言つた。

アーリーはため息をついて呟くが

ジークはすぐやつてきて言った。

「Jリーグにしてるのは全て戦争に巻き込まれてる者はかりだ。
お前が氣が足ない。戻れ！」

「つべこべ言わずに治せー。さもないと痛い目にあうぞー。」

兵一隻に呑み入る口うぬぬめ力

すると、兵士長の腕がポロッと落ちた。

だいぶストレスがたまつて、この人たちに憂さ晴らししてゐるな

兵士長は土下座して言った。

「頼む！俺はいい！負傷しているあいつらだけでも治療してやつて

「お前らが傷ついたもの、家族かいりんた！」
「頼む！ あい、今ははっきりを待っている家族かいりんた！」

「ものに家族はないのか？」

1

「死ね！お前らみたいなやつらは皆死ね！」

「あんた人の命を差別するのか？」

「する！」こでは、俺がルールだ。治すか治さないかも俺が決める

！」

オータムは黙つて聞いていたが、やがて口を開いた。
「兵士を辞めなさい。一度と人を殺さないと誓うなら、治してもいいですよ！」

「…兵士を辞めるなんて言つたら、国に反逆者扱いで家族もろとも死刑になる…それはできない。」

「選びなさい。家族もろとも国を捨て、北へ逃げるか…それとも今ここで死ぬか！」

「…わかった。あいつらにも事情を説明して説得する。」

「約束ですよ！ジーク先生。治してやってください。」

「…しょーがねーなー！…面倒くさいなあ！」

なんて医者だ

兵士長は思つた。

数か月後

兵士が診療所に来た。今度は兵士長を連れて…

「…頼む！約束を破つて今更こんなところに来れた義理じゃないのはわかっている。だが…だが、このままじゃ…このままじゃ兵士長が死んじまつ…！」

ジークはそう言つた兵士の胸ぐらをつかんで叫んだ。

「今度は何人殺したんだ！帰れ！」

「誓つ！今度こそ国を逃げるつて誓つ…！国を出て追われるのが怖かつたんだ！頼む今度こそ約束を守るから…！」

「お前たちの約束に何の意味がある…！」の世には救えねーバカどももいる。お前たちみたいなのだよ…」

ジークはそう言い放つた。

兵士は泣き叫び、ジークに襲いかかってきた。ジークは呪文で、兵士を吹き飛ばし気絶させた。そして、兵士長もろとも外へつまみ出した。

1
日
後

兵士は田を覚ました。

傍らには兵士長が横たわっていた。

そいか結局兵士長を救えなかつたんだ

兵士が横たわりながら涙を流していると
兵士長がヒクリと動いた

兵士長の負傷は全て治っていた。

卷之三

「なあ、オータムいつまで戦争が続くんだろうな…」
「さあ…でも、先生が非情になりきれない所…私好きですよ…」
「…何が…あいつらはまた人を数えきれないくらい殺して…いつか
はお前たちの大切な人まで殺すかもしれないんだぞ…俺はそんな奴
らを…見捨てきれないんだ…」

- 1 -

魔術医師ジークの苦悩は続く

弟が帰つてきた

「おお！息子のあのひどい火傷が跡形もなく…先生…なんとお礼を言つていいやら。」

「さつさと帰れ！次…！」

そのあまりに冷たいジークの言動に対し、オータムがジークに向かって叫んだ！

「先生！いくらなんでもひどすぎませんか！？せつかくお礼を言つてくれているのに…」

「その理由を教えてやるつか！？それは、俺が156時間不眠不休だからだよ！？最近の患者数は尋常じゃないぞ…」のままじや本当に発狂しちまうよ！次…！」

確かに

オータムは思つた。

ジーク先生といえどさすがに最近の患者の数は尋常じゃない。オータムたち助手は3人でローテーションしているが、それでさえ最近は倒れそうなほど忙しい。ジークの顔も殴りまくつてもはや原型をとどめていない（ジークは自分で治療できるが…）

「次つて言つてんだろうが！患者連れてこいや…！」

しかし、次の患者は現れなかつた。

代わりに診療所に入つてきたのは弟のロスだった。

「患者はもういないよ、兄さん。他の患者は全員治したよ。」

「ロッロロロロス！お前なのか…本当にお前なんだな！」

「ただいま。今まで一人にさせて本当にごめんよ。」

ジークはロスに熱いハグをした。そして、即座に倒れこんだ。

「ロス…」

「オータム…ただいま。」

「今更どの面下げて帰つてきた…って言いたいけど…今の状況じや

受け要らざる負えないわね。」

助手の2人もロスの帰還に素直に喜んだ。

3時間後：

ジークは田原めた。

診療所に行つてみると、ロスが自分の代わりに患者の治療をしてくれていた。

ロスがジークに気づき穏やかな声で言った。

「まだまだ寝ていいのに。しばらくは俺に治療は任せて自由にするといいよ！」

「ロースー！お前はなんていい弟なんだ。」

そういうつてまたロスにハグをして、外へ出でいった。

「どこへいったんだろ？てっきり寝ると思ったんだけど…」

「大方、恋人のところにでも行つてるんでしょ…」

「恋人！？今兄さんには恋人がいるの？」

「だから、そういうてるでしょ！」

「じゃあ、オータムは？」

「…仕事しろよ！バカロス…！」

「ふーん！そつか…」

この会話を、助手たちがカーテン越しで聞き耳をたてていた。

助手の2人はひそひそ声で話しだした。

「えーっ！何！？この三角関係！」

「いや…オータムは前からジーク先生に好意を持つてたんじゃないかな…」

「なるほど…でロスはオータムのことを…？あつもしかしてロスが

突然出ていったのってそれが原因じゃ！」

話に夢中になつていると、ベッドの患者が死にそうな声で助手たちに話しかけた。

「あのー早く先生の元へ連れてつてくれんと……いつ息が……」

魔術医師ジークの苦闘は続く

口入が診療所に帰ってきて1週間が経った。

「…お前が帰ってきて俺は本当にうれしい！」

ジークは今日の朝もそう言い口スにハグをし、眠りに入つた。

緊急時の時以外はロスとシーケで12時間ずつ交代勤務で当たる。

とにした。

ジークは口スが帰ってきたことより、12時間ずつ交代勤務になつたことに対する涙がでるほど感動していた。

田代の处置中不口答ムは田代は言ふた
「ドーバはゆくむ三ツドーバ。」

さすがは口才先生であります。先生と仕事を分けられるのは世界中であなたぐらくなきのでしょうね。――

「いやあ、俺ぐらいの魔術医師は世界中にまだいるやついるよ。」

「…意味のわかんない謙遜しないで下さい。あなたほどの医師がご

つちが^{魔術}矢師として上なんだろ? うね?

7

オーダムは答えを差し控えた。

他の助手が口スに対して質問した。

「口下先生はこの診療所を出て何をしていたんですか?」

「二十九の帶一二三の御用」ノ御覽覽御記甚固

働き、勉強してたんだよ。

「えつ！医療魔術の最先端じゃないですか！？……ももももしかして所長口スつてあなたのことだつたの！？」

「…まあね。」

「すゞーーい！すゞーーい！オータムとジーク先生はこのこと知っていたの？」

オータムはバツが悪そうに首を縦に振った。

「なーんで教えてくれなかつたんですか！？私たちにはロスは行方不明になつたつて言つてたじやないですか！！」

「…」

オータムが答えに悩んでいるとロスが助けに入った。

「まあまあいいじやないですか。」

3時間後：

ジークは体力が回復し、目が覚めた。（長年3時間睡眠以上取ったことがないため、どんなに疲れていても3時間後には目覚めてしまう。）

ジークにはある計画が頭に浮かんでいた。

そして自分なりのビジョンをなんとか紙にまとめることに成功した。その紙を持って、ロスのところへ行つた。

「ロス…お前が帰つてきて…」

「兄さん！一週間ハグされっぱなしやー…もういいよもうー…」しかし、相変わらずロスにハグをした。

ロスはハグされながらもジークに言つた

「…もう…そんなことより、僕と兄さんのどっちが魔術医師として上だと思う？」

「そんなのロスに決まってるじゃないか！お前だよお前…！…そんなことよりお前に見せたいアイデアがあるんだ…！」

「そんなこと…」

ロスはその言葉に非常にショックを受けた。

兄のジークを超える魔術医師になるようにロスは今まで頑張つてき
た。

そして猛勉強と仕事によつて医療魔術所長といつ誰もが世界一と評されるほどの地位も手に入れられた。

それほど超えたいと思っていた兄にさらつと流されて、ロスは非常に腹が立つた。

ジークは手に持つていた書類をロスの前に広げた。

「俺たちの病院を設立しないか！？」
ジークはロスにそう言った。

ロスはジークの言動の意味が分からなかつた。（この時代、民間では個人の診療所くらいしかなかつた。）

「病院？」

「軍の大規模な診療所みたいなもんさーいや、それよりはるかにでかい診療所を建てたいんだ。」

「そんなものの俺たちに建てられるわけないじゃないか！第一、お金はどうするのや！…」

「お金は俺たちがずっと診療所をやつて来た金がある！何年間も使う暇さえなくつて気が付いたらこんなに貯まつっていたよ！わはははは！」

ロスはジークの持つっていた計画書に目を通した。

「こんなに…小国の国家予算くらいあるじゃないか！…」

「いやー！金持ちからはガンガン金貰つてたからなー貪り入どもにも払えられる限り徴収してたし…」

「鬼！」

「命の値段としちゃ安いもんだと思つけどな。」

「お金はあつても、魔術医師はどうするんだー？」この大戦中じやほんじが軍に属しているだろ！？」

「かき集められるだけかき集めて、それでもダメだつたら一から育てるしかないだろうな…」

「一からつて…そんな時間どこにあるんだよー？医療魔術は一朝一夕でできるもんじやないだろ！…」

「時間ならあるよ…俺とお前と一人毎日1~8時間ずつ働けばいいだろ？」「…なんでもまた…こんな計画を？」

「俺たちがいなくなつた時、誰が患者を助けられるんだ？…最初は辛いかもしれないけど、この計画が成功したらもうと多くの患者が助けられるんだ！」

「兄さん…」

ロスはジークのこの言動に深い感動を覚えた。
そして、同時に激しい敗北感に苛まれていた。

「ロスよ！…10年後、20年後を見て、いい魔術医になれよ…」
ジークは勝ち誇ったようにそう言つて、外へ出ていった。（ラーマに会いに）

その後、ジークの診療時…

オータムがジークに話しかけた。

「ジーク先生…あの偉そうな話…嘘ですよね？」

「えつ…いや、嘘なもんかい。そういう気持ちももちろんあるよ…」

「他にどんな気持ちがあるんですか？」

「いや…やつぱり10年後、20年後考えたらね…休み欲しいし…もし結婚でもしようものなら新婚旅行だって行きたいし、子作りだって…ねえ…！」

ジークはウキウキしながら言つた。

「…はあ…」

オータムはため息しかでなかつた。

「次の人！」

40代の女性と20代の男が入ってきた。

「いや…あのひとりだけなんだけ…」

「私は付添です。採用して頂きたいのは息子なんです。この子はや
ればできる子なんです。ほら、チヤちゃんからも「挨拶して！」

「…チヤです。よろしくお願ひします。」

オータムがジークに耳打ちした。

「ジーク先生…親同伴はどうかと思いまますよ。だつてあの人もうい
い大人じゃないですか！？」

「いや…やればできるつてこいつお母さんの言葉を…俺信じようかと
思うんだけど…」

「だから…ただのマザコンじゃないんですねか！？」

「採用。」

「ありがと「いざ」こます。ありがと「いざ」こます。この子はやれば
できる子なんです。ほらっ！チヤちゃんからもお礼言こなさい。」

「…ありがとうございます。」

「次の人！」

負のオーラに満ちた女人が出てきた。

「…初めて…わたくしサシャと申します。」

「特技は？」

「黒魔術です…特に呪いの呪文では負けたことがありません…彼を
取られた時なんかは2週間入院させましたから…フフフ…」

「…2週間呪い続けられるなんて根性あるんだね…」

オータムが耳打ちした。

「ジーク先生…ジャンルが違いませんか?ビットちかとこいつと戦う方
だと…いやそれすら違つよくな…」

「いや…」うこうのが伸びるんだよ…」

「いやいやいや…魚のオーラに満ちていますよ…」

ジークは叫んだ。

「採用!」

「ありがとうございます。…あーよかつた…あなたを呪わずにすみ
ました…フフフフ」

「次の人!」

いかにも魔法が使えなさそうな老人が入つてきた。

「えーっと…じゃあ自己紹介からどうぞ!」

「じゃ…ジャシャーンと申すものじゃー魔術医師歴…」くつじやつ
たつけ?」

オータムが耳打ちした。

「ジーク先生…この人不採用でしょ…さすがにこの人は不採用で
すよね!?」

「いや…この人には何かある…」

「いやいやいや…」の人に治療がいるくらいでしょ…」

オータムの心配をよそにジークは叫んだ。

「採用です!-!」

「わしに全て任せときなさい…若いもんにはまだまだ負けんぞ!」

採用面接後…

「先生…全員採用してどうするんですか！！」

「だつて誰が凄いかわかんないじゃん！」

「…でも、多少は選びましょうよ。じゃなきゃ最初から全員採用でよかつたじゃないですか！？」

「…採用面接…やつてみたかったんだよね。」

「はあー頭痛くなってきた。」

オータムはため息をついた。

というヒュージークは念願の病院を設立した。

「今日は最初の授業か……。」
総勢50人の魔術医師候補を迎え、建物も新しく立て直した。

「先生！ 前は弟子募集した時はみんな辞めちゃったんですか？ 今回
は気を付けてくださいよ！」

「わが子であるよ。今日は余裕がありますから！」

「えー、今日は切り傷を治す魔法をやります。できない人！」
誰も手を挙げなかつた。

軽傷患者が50人ぐらいやつて来た。

レバノンの歴史と文化

チャは魔法を掛けた。すると、切り傷はみんなひたすら治っていく

セイタノノミツヒ

「見直しましたよチャさん！やればできるんですね！」

シーケはその光景を見て言った

かつてゐるんですよ!

するとチャの母親がチャの隣に突然現れた。

「申し訳ありません……ついついチヤちゃんが心配で……」

次の人をおじいちゃん魔法使いのジャシャーンが出てきた。

“どうやら魔法を忘れたらしい。

次の人は黒魔術のサシャが出てきた。

サシャが患者に魔法を掛けると、なんか傷口が広がっているような気がした。

「…この人可愛いから少し意地悪したくなっちゃいました…フフフフ

オータムにジークが囁いた。

「やっぱ…この3人はダメかな…」

「だから言つたぢやないですか！ちゃんと責任とつて立派な魔術医師に育ててくださいよ…」

一部の例外を除き、ほぼ皆軽傷を治す呪文はクリア - できた。

次に重症患者達を連れてきた。

「この患者の怪我を誰か治せる人！」

4 3人が全員試したが、駄目だった。

7人の有能な魔術医師候補は治すことができたが、そのうちの3人は疲労でフラフラだつた。

なんてこつた…今日は余裕があるので人材は不作だ… -
ジークとオータムはひそかに思った。

今が我慢の時！？

魔術医師候補を採用して2か月がたつた。

まだ、一人も辞める人がいなかつた。

理由は給料が凄くいいこと、週休2日制（残業なし）、優秀な教師（ロス、ジーク）がいることだつた。

しかし、ロスには悩みの種もあつた。

それは、2か月経つたにも関わらずあまり魔術医師候補は成長していないように思えたからだ。（特にチャ、ジャシャーン、サシャ）オータムも同様に感じていた。

以前弟子をとつた時は、2カ月でジークの仕事をかなり楽にできる魔術医師が一人も誕生した。

今のもメンバーワーではそんなことはとても望めそうにない。

そこで、ロスはジークに相談することにした。

「兄さん…なかなか育つてないような気がするんだけど…」

「ロスはせつかちなんだよ！みんな確実に力をつけてるよ。」

「そーかなー…」

ある日のこと…

「じゃあ、今日も君ら3人には軽症患者を見てもらいます。」

「ジーク先生！チャにはそろそろ重症患者を任せてもいいと思います。」

「お母さん！彼にはまだまだ早すぎます。まずは軽症患者で経験をつけてからです。」

「…他の子たちは重症患者を任せられているのに…差別だわ…！」

「差別…ですよね…やつぱり…」

黒魔術師のサシャが便乗した。

「そうじゃー差別じゃ…迫害じゃ…わしゃまだまだ若いもんには負

けんぞ！」

ジャシヤーンも便乗した。

ジークはでこの3人を殴り倒したい衝動に駆られたが、必死にそれを抑えこんだ。

「チャ…というかお母さん！いいかげんに帰りなさい！！！チャのためになりません！サシヤ…可愛い患者を呪う癖をやめなさい！重症患者はそんなおふざけ一つで命取りになります！ジャシヤーンは…魔法をまず学びなさい！」

ジークはそう叱つたが、彼らはまだふてくされていた。（チャの母親は帰らないし）

そして、サシヤがボソッと呟いた。

「そんなどから先生人気ないのよ…」

助手はそれを聞き、ジーク先生に聞こえないように願つたがジークはばつちり聞いていた。

横にいたジークはニツコリと笑い、言った。

「じゃあ始めなさい…ちょっと俺は外に出てくるから…」

そう言い残しジークは外へ出ていった。
どこへ行くのだろうと思い、助手は後をつけると外れの部屋に入つていった。

助手がその部屋の壁に聞き耳をたてると、発狂したような叫び声が聞こえてきた。

「うお…………わあ…………くつそ…………なんてむかつくやつなんだ！！殴り倒したい殴り倒したい殴り倒したい！
！実力もねーくせしやがつて——」

30分後：

ジークは戻ってきた。（声が少し枯れていた）

助手はジークを見てよく我慢しているなと思った。

ある夜に…

「オータム…」の後時間ある?」

「はい。なんですか?」

「ちよつと食事に付き合つて欲しいんだけど…」

「えつ…もつもちろんいこですけど…」

「ほんとに…? あーよかつた。ナードの下見したかったんだよねー。」

「…」

高級レストラン「秋晴れ」にて…

オータムとジークはテーブルに座り、高級そつな料理が運ばれてきた。

「ふーん…なかなかよさそうな雰囲気だな。料理もおいしい。」

「ラーマさんと食事するの初めてじゃないんでしょ? 今更下見なんかしなくても…」

「いや…そろそろアレかなと思つて。」

「アレって…あ、あアレですか…うううう…もうここですかね…」

「…」

オータムはワインを一気飲みした。

「まあ…そろそろな…俺もい年だしな。ナじめつけよつと思つてな。」

「…おめでとひびきます。」

「…やあ…まだオッケーもらえたわけじゃないけどなー。」

「…そーですね…頑張つて下さいね。」

「おー…まぢは告白しないと始まらないしなー。」

「…告白へプロポーズじゃないんですか?」

「ブ、ブロボーズ！？お、おい気が早すぎるだろ！」

「もしかして…まだ付き合つてもないんですか！？」

「…」

「もーなんなんですか！…驚かせて！いい大人なんですから告白なんでもうしてるとと思つてましたよ！」

「…悪かったな！俺はお前と違つて恋愛経験が少ないんだよ！」

「何言つてるんですか！私だつてほぼ皆無ですよ。だいたい、15歳からあなたと働いてろくに休みなんか貰えなかつたじゃないですか！」

「…そーだつたっけ？」

「そーですよ！」

「そーかー。オータムには苦労かけたな…」

「まだ全然忙しいんですけどね…」

「…あのさ、オータムはさここの仕事を辞めて逃げ出したいって思つた時はない？」

「そんなのないに決まつてるじゃないですか！」

「…俺はいつも思つてるよ。」

「知つてますよ。いつも叫んでるじゃないですか。」

「うん…毎日毎日無数の患者たちばっかり救つていつて、時間があつという間に過ぎて…本当に嫌になる時がある。」

「…はい。」

「オータムは本当に凄いよな。…それだけ。」

「私だつて…患者たちだけのために頑張つてるんじゃないですよ。」

「…でも、給料だつてもう使い切れないのであるだろ？患者以外のために働く理由なんであるの？」

「…自分のためですよ。…私、先生の逃亡を阻止するじゃないですか…それはね…」

「それは？」

「私の…私の尊敬する先生だから…逃げてほしくないんです。」

「…」

「お互いに苦労しましたね。」

「ああ……長いよつな短いよつな……やつぱり同じなあ……」

「ラーマさん！僕と付き合つて下せ！……いや『僕』はないなラーマ！俺と付き合つて下せ！……敬語じゃないほうがいいか俺と付き合おうか！……付き合おうぜ！……あーなんか違うんだよなあ」「先生！診療中に何を独り言ぶつぶついってるんですか！気味悪いですよ。」

「…オーダム…俺、昨日の言葉を今考えてるんだよ、何かいいと思う？」

「いい言葉があつますよ。ちひりとおしゃべりしてやる。

「わあーーーびつてせんなんよー。」

「オーダム、况さん、何か大きな事がし

?

「シーケ先生に聞いてください!!」

ロスはオータムをちらつと見た。そして再びジークの方へ視線を写して言った。

「よし！わかつた。俺も応援するよ。明日がその日だつたよね。今日と明後日も俺一人でやるから仕事のことは気にしないで告白に全力を尽くしてくれ。」

「口…・口スうーーー！お前はなんていーい弟なんだーーー！よろしく頼む。じゃあーーー！」

ジークは診療所をそそくさと去つて行つた。

オータムは口スに言つた。

「ロス先生。何を企んでいるんですか?」

「別に何も… ただ、兄さんの幸せを祈っているだけさ。」

1

「オータムは... 兄さんがラーマさんと付き合つたら... 兄さんを諦められるのか...?」

1

ジークの部屋にて

「服は良し一めりやめりや高い服で助手、弟子も絶賛だつたからな
!!」歯はノスマーフン「次請へ、で予約つたが、歯の言葉も効え

ジークは異様にテンションが上がり、自分の部屋で叫びまくっていた。

ジークが告白しようと決めていた日、ある町のメインストリートにて

「お待たせしました。ジニウ先生。」

「いや、金然寺つてなーおーあ、
行こいつかー!!」

「あの… 私ちょっと行ってみたいレストランがあるんですけど、今

田はそこに言つてもいいですか？」

「えつー… も、もちろんーじやあその店に行こうか！」

レストラン「秋晴れ」予約したのにー！そこに行こうって言えな

ジークは心の中で叫んだ。

えつ！？

レストラン 「サマーナイト」にて…

「ジーク先生。何食べます？」

「えーっとねえ…」

「全然わからん。何がいいんだろう…」
ジークは思った。

「私はこれなんかおすすめですけど…」
「本当に…じゃあそれにしようかな。」

料理が出てきて、食べ始めた。

「おいしいですね。」

「そうだね。」

「…」

「…」

「あつ、最近はやつぱり忙しいですか？」

「いやあ、そうでもないよ。最近は弟子もできだし、弟も帰つて來たしね。」

「ロスさんでしたよね？凄い人なんですよー？」

「そりなんだよ…なんか凄い研究所のトップだつたらしいんだよ。しかも、最年少で！」

「さすが、ジーク先生の弟ですよね。」

「いやあ…」

「…」

「ラーマの方は最近忙しい？」

「私は変わりないですよ。」

「雑貨屋の方も最近大変でしょ？戦争もあって仕入だつてままなら

ないだらうし……」

「そ、うなんですよー。なかなか商品が入つてこなくつて……」

「……」

「……ぜ、全然会話が盛り上がらない。じつじよつ……」

ジークは告白しようかどうか迷った。

が行くしかない思った。

今言えなかつたら次も言えない気がすると思った。

「ラーマ……」

「はい?」

「俺と……俺と付き合つてくれないか?」

「……『じめんなさい。』」

「……そつか。うん……わかつた。」

「……『じめんなさい。』」

「いや、いやいや全然気にしないでいいんだよー。」

「……」

「あつ……そろそろ飯も食べたし……でようか?」

「はい……」

2日後診療所にて……

助手がジーク先生に話しかけた。

「ジーク先生、どうでした?」

「うん……ダメだった。あははは……」

「えつ! 驄目だつたんですか! ?」

「まあ……ね。さあて仕事しようか! ?!」

ジークはいつもより仕事に励んだ。

弟子たちの経過観察

「ジーク先生フラれたらしょよ。」

「えーっ！ そうなの！ かわいそつ…」

弟子たちが噂話していた。

「自業自得よ！ あの人には、性格上の問題があるんじゃないかしら。」

「同じく弟子であるサシヤが口を挟んだ。
弟子は反論していった。

「そう？ いい先生だと思うけどな…」

「あの先生、やたらと弟子をひいきするじゃない？ それにさ…」
話の途中でジークが入って来た。

「じゃあ今日も授業を始める。と言つても、いつもの如く実践授業
だ。患者を連れてきているから治療を始めなさい。」
サシヤが手を挙げて言った。

「先生！ 私たちはもう先生の指導がなくとも一人前に治療できます。」

「 なんで全然できないお前が言つ

心の中でジークは思つたが、言わなかつた。代わりに諭すよつて説
明した。

「君たちの中にはもう自分が一人前にできると思つてゐる人もいる
だろう。ただ、一度の間違いが患者の命を奪つ場合、力が足りない
で患者が死んでしまう場合が來ることもある。そういうた可能性を
少しでも減らすために私がついていることを忘れてはいけない。」
サシヤはぼそつと言つた。

「フラれたくせに…」

シンと静まり返つてサシヤのその声が響いた。

ジークはその言葉を無視して、患者たちを連れてきた。

そして、20分ほどその部屋を出ていった。（別の部屋では異様な

叫び声がしたと黙つ)

30分後…

「い、痛い痛い痛い！…」、この人…いだだだ…」

サシャの患者が突然すごい痛みを訴えた。

サシャは呆然としていたが、ジークはすぐに来て、患者を治した。

「サシャ…かけた呪文が全然違うよ。これでは痛みを訴えて当然だ。

「…」

「これが、重症患者の治療だつたらどうする？少しの呪文の間違えで重大なことになることをよく理解しておきなさい。」

すつきりした。

と心中でジークは思った。

「なによ…なによなによ…！私ばっかり非難して…私が全部悪いつてわけ！？」

「は？」

ジークは訳のわからないサシャの切れ方に呆然とした。
しかし、依然おさまらないサシャはジークに向かってとびきり強い黒魔術をかけた。

ジークはその魔法弾に当たつたが、全然効かなかつた。

「嘘…」

サシャは自分の黒魔術が効かないことにショックを受けた。
ジークはため息をついて言つた。

「この程度の魔法力じゃ俺には傷一つつけることはできないよ…気がすんだらまた治療を始めなさい。」

「…」

サシャは悔しそうに患者の治療を再開した。

治療室にて…

「ジーク先生…聞きましたよ。よくサシヤを前にしませんでしたよね。」

「わからないもんさ…誰が最後まで残ってくれるかなんてな。オータム、お前だつてそーだつたものな。」

「私はあんなにエキセントリックではなかつたです…」

「でも、変な子で、仕事も全然できなかつたから一日で辞めると思つていたんだけどな…」

「…そんなに…変では…」

マークさん

「次の人！！」

オータムはいつもの通りに患者を案内しようとした。
その患者はオータムの前でひざまずき、言った。

「オータムさん…僕と付き合って下さい。」

「えつ…あの困ります…今診療中なので…」

「じゃあ仕事が終わるまで待ってますので…」

そして、その男性は去って行つた。

「えつあのーーー！」

オータムは声を掛けようとしたが、その男性はもういなかつた。

30分後…

患者のおじいさんがオータムに向かつて叫んだ。

「オータムさんや…わしらを置いて行かんでくれ！」

「な、何を言つてるんですか！？」

患者のある男性も言つた。

「…今度俺と食事でも…」

「…お断りします。」

患者の子供もごねた。

「僕がオータムのお嬢さんになるんだい！！！」

「…ありがとうございます！でもね…私あなたが大人になるまで待てないわ。」

「…そんなに若くないもの…『めんなさい。』」

その後もオータムは6人の男性に告白された。

仕事後…

仕事を終え、帰ろうとするとき、さつきの男性が入ってきた。

「オータムさん…僕と…僕と付き合つて下さい。」

「…またあなたですか！？あなたのおかげで大変だったなんですから

…！」

「命がないと思いました…そんな中、あなたと出会つて…天使が舞い降りたと思いました。」

「…あなた、マークさんですか！？」

「思い出して貰えましたか？」

「思い出しました！元気でしたか？」

「はい…おかげ様で！」

「つてなんで私なんかに…」

「ただただただ…あなたのことが好きなんです。」

「…」

「今好きじゃなくてもいいんです。ただ、もつと僕のことを知つてもらいたいんです。最初は友達としてでもいいんです！」

「でも…」

「お願いします…！」

「…分かりました…分かりましたから…！…頭あげてください…」

オータムとマークは友達として付き合つことになった。

「オータムさん、マークという人と付き合つてゐんですつて…」「そうそう…マークつて以前患者だつたらしいわよ…」弟子の女の子たちは集まつて噂話していた。

そこに、診療所一の情報通の助手であるリースがやつて来た。

「ちょっとあなたたち…私抜きでそんな楽しい話しないでよーーー！何から知りたい？何からしりたい？」

「マークとは今どこまで進んでるんですか？」

「うーーーんとねえ、まだ1・2回しか遊んでないらし…」「ふーん。オータムさん奥手っぽいもんねえ…」「はい。」

弟子のひとりの女の子は手を挙げた。

「はい！そこのあるた！」

「マークさんてどんな人なんですか？」

「それが、もともと凄いお金持ちらし…のよ…ビのくら…かはわからな…けど…ね！」

「えーーー！オータムさん逆タマじやないです…」「出会いのきつかけは何なんですか？」

「マークは2年前この診療所に運ばれてきたの。ひどい怪我でねえ…ジーク先生の魔法でも完治するのに2か月以上かかったの。そこで、オータムが献身的な介護をしたつてわけ。」「すごーい！すごーい…！」

「オータムさんはマークの事はどう思つてるんですか？」

「さあねえ…付き合つてるつてことは嫌いじやないんだらうけど…ねえ！オータムは色々あるし…ねえ…」「いろいろ…いろいろつてつどうこいつ…ですか？」

「それがねえ…昔ロス先生となんかあつたらしいのよ…！」

「えーーー！そーいえばロス先生とオータムさんてあんまり話さない

よつな氣もする…」

「でしょでしょ……それでねえ…」

「…何をしてるのかしら?」

リースが顔を上げるとオータムが作り笑顔で立っていた。
弟子の女の子たちはわれ関せず顔で下を向いて、リースはびっくりして声がでなかつた。

オータムはため息をつき、言つた。

「あなたたち…もう授業の時間でしょー。ジーク先生が待つてゐるわよ。
あなたたちの成長が患者の命を左右するのを覚えておきなさい。…
そしてリース…」

「は、はい！…」

「尊話もいいけど、仕事をやる時はきちんとやりなさい。もう休憩時間はとっくに過ぎてゐるでしょー!…?」

「はい！すいません…!」

リースは逃げるよつに走り去つていつた。

「まつたく…」

「よく激怒しなかつたもんだね。オータムも丸くなつたもんだね。
オータムが振り向くとロスが前にいた。

「尊話ぐらいさせいやつてもいいでしょ…まあ私の話だつたからか
なり腹が立つたけどね。」

「…マークと付き合つてゐんだつて?」

「うん…まあね。」

「そつか…どう?」

「うん…いい人よ。私にはもつたいないぐらい…」

「…俺はオータムは誰とも付き合わないつて思つてた。」

「…今は好きじゃなくてもいつかは好きになれる…そんなこともあ
るのかなと思つて。」

「でどうだった?好きになれたの?」

「…」

大国から来た男

「次の人！」

ロスがそういうと、一人の男性が入ってきた。

「ロス先生！」

「ザックス…か？」

「研究所に戻ってきて下さい！お願いします！…」

横にいたオータムが横やりを入れた。

「ちょっと！患者じゃないのなら出ていって貰えませんか？」

「失礼しました。私は研究所の副所長のザックスといいます。」

「いったい何の用なんですか！？」

「ロス先生を連れ戻しに来ました！先生はここよりもっとふさわしい場所があります。」

ザックスはそう言い、ロスの方を見た。

「先生！研究所のみんながあなたの帰りを待っています。帰ってきてください。」

ロスはザックスの顔をじっと見て答えた。

「ザックス…俺は研究所に戻る気はないよ…」

「なんですか！？」

ロスはオータムの顔をちらつと見た。しかし、すぐにザックスを見て言った。

「ここが俺の帰るところだからさ。」

ザックスは怒つて言った。

「じゃあ帰りません！私はここから一歩も動きませんよ…！」

騒ぎを駆けつけてジークが来た。

「なんだー貴様は！！ロスを連れて行きたいんだつたら俺を殺してから連れてけ！！」

「おいおい、兄さん。俺は行かないよ…あ、そつだ…ザックスがここで働いてくれるそつだよ！」

ジークはそれを聞くと、ザックスの方を向いて言った。

「…君どれくらい医療魔術できるの？」

「私は先進医療国の研究所副所長ですよ…!…医療魔術で右に出るものはロス先生一人です。」

「採用！いやー働いてくれるんだつたら、最初からそーいつてくれよー！さすが、ロス。頼りになる右腕を連れてきてくれるなんてお前は最高の弟だ！！」

「あなた…ロス先生のお兄さんですか！？これは失礼しました！！」

「いやあいいんだよ。頑張って働いてくれよ…」

「はつ、はい…！」

強情な男

「ここのところジークは凄く機嫌がよかつた。ザックスが診療所に働いてくれるようになつて治療がかなり楽になつたからである。

「ロス！ザックス君凄い優秀じゃん！彼ホント凄いよ！…」「まあ、研究所でピカイチの才能だつたからね。でもね…」「でも？」

「まあ、今にわかるよ…」

診療中…

助手が走ってきた。

「ジーク先生！大合戦があり、患者が3000人が押し寄せてきています。」

「3000人か… やれない数ではないな… よし！全員で治療にかかるぞ！！」

ジーク達は全員で協力して治療することにした。

ジークとロスは単独で治療にあたりザックスは他の使える弟子たちを補佐にあてた。

36時間後：

ジークの方の治療が終了した。

ジークはザックスの様子を見に行くことにした。まだ、診療所は患者であふれていた。

「ザックス先生！患者の様子がおかしいです。」

「な、何…おかしいな…そんなはずは…」

ジークはその患者の近くへより、診断した。

そして、呪文を唱え患者を治した。

「ザックス、ミスは誰にでもある。ここで踏ん張れるかが優秀な魔術医師だぞ。」

「い、いや私はミスなんかしていない。」

「いやあきらかにミスだろ！認めないと今までたつても成長しないぞ！」

「…」

ザックスは納得していない様子で次の患者の治療にあたつた。

治療終了後：

「兄さん。ザックスはどうだった？」

「変なところでエリート意識がある気がするな。」

「そりなんだよね。自分のミスは絶対に認めないし、自分の認めた人以外には心は絶対に開かないんだよね。」

「まあ、ここで働いてくれればなんでもいいんだけどねー」「…現金だよ。兄さん。」

ロスのトーク

ある治療中の「こと…

助手のアリーがロスに話しかけた。

「ロス先生… 今度一緒に食事にでも行きませんか？」

「いいよ。 いつにする？ 君の休みに合わせるよ。」

やつた！ ロス先生… 紳士だわ

耳に壁あり障子あり… 瞬く間にその噂は広がった。

女の子の弟子たちの会話中…

「ロス先生と助手のアリーさんが今度食事に行くらしいよ？」

「えー！ ショック… ロス先生とアリーさんが付き合つなんて…」

「アリーさんにはロス先生はもつたいないよねー。」

「そうそう！ 何様つて感じよねー！」

ロスは女性から人気があつたので、弟子と他の助手にとつてアリーは敵になつた。

「アリーさん！ 来週の休むなんですが私と代わつてもらえません？ 妹の結婚式があつてどうしてもこの日は休みたいんですよ。」

「えつ… そつなんだ… アマンダも同じ日休むらしいからアマンダに代わつてもらえるとうれしいんだけど…」

「アマンダはちょうどその日に母親の誕生日みたいで… どうしてもアリーさんが用事があるんでしたら諦めます。… 何か特別な用事ありますか？」

「そつなんだ… ジャあしようがないよね… いや、大丈夫よー。妹さんの結婚式ですものね…！」

「わーい。 ありがとうございます。」

「いえいえ…」

ロスとアリーの治療中…

「ロス先生…すいません…空けてもらつた日なんですねけど、どうして私が空けることができなくて…」」めんなさい。」

「いや、しょうがないよ。そんな時もあるよ。次の休みとかでも全然いいし…」

「本当ですか？ありがとうございます。」

ちょいと回りじとが2か月ほど続いた。

ロスとアリーの治療中…

「ロス先生…」

「またが…了解。次の休みまた空けておくから…」

「いえ、もう結構です。これ以上は先生に迷惑はかけられません。本当にすいませんでした。」

「いや…君は悪くないのに、こんなことおかしいよ。2か月も休みが取れないなんて…ちょっとオーダムに言つてくる。」

「いえやめてください…私もきっと…同じことしますから…彼女たちの気持ちも…残念ながら、私わかつねやつんですよ。…怒る資格ないですよね。」

「…わかつた。」

また、ある診療中…

「あれ、今日の助手はアリーって聞いてたけど？」

「アリーさんは体調不良で休みました。」

「ふーん…」

助手の女の子は後ろめたさからロスの田線を逸らした。

アリーの部屋にて…

アリーが一人で寝込んでいると、ロスが中に入ってきた。

「ロス先生！どうしたんですか？治療中じゃないんですか？」

「今日は兄さんに代わってもらつたよ。」

「そう言って、呪文を掛けた。」

すると、アリーの熱はたちまち冷めて、体力が回復した。

「自然に治る病気だつたら、呪文を使わない方がいいんだけどね…」

「今日は特別。さあ準備して！」

「準備つてなんのですか？」

「何つて…食事に行くんだよ。前から約束してたでしょ。さあ、早く準備して！」

「ロス先生…ありがとうございます。」

結局ロスとアリーは食事に行つた。

ジーク・ザ・ダンシングナイト

診療中、ジークがオータムに話しかけた。

「オータムつてさ…今幸せ?」

「別に普通ですけど…」

「いやーそーだよなー!かつこにい彼氏がいるんだもんなー…」

「彼氏じゃありませんけど…」

「俺つてさ…なんでモテないと思つ?」

「知りませんよーーてか仕事してくださーよーー!」

「今度祭りあるよね。そこでちょっと楽しんじゃおつかなー?」

「いいんじゃないですか…」

「そうだよね。この際、彼女がいるいなは忘れて踊り狂う…そんな日があつてもいいよねー!ー!」

「まさか…ジーク・ザ・ダンシングナイトをやるんですかー!?」

「そつ…一夜限りの復活さ…ジーク・ザ・ダンシングナイト!」

「ちよちよひよつと待つて下さー…やつたあー私その日非番ですー!」

「!」

「オータム…運がいいな…その日は伝説の幕開けだぜー!ー!」

1時間後…

「兄さん!聞いてないよーーその日にジーク・ザ・ダンシングナイトやるなんてー!俺その日仕事だもんー!」

「…残念だなロス…だが、お前のサポートがなければ決して復活させようなんて思わなかつたぜー!…ありがとうなー!」

「…ザックスにその日の治療代われるかどうか聞いてくるー!ー!」

1日後…

ジーク・ザ・ダンシングナイトをやるといつ噂が流れ、住民たちが診療所に押し寄せてきた。

「本当に…本当にやるんですか…？」

「ああ…やるともどき…！」

「じゃあ、わしらも久々に燃える時が来たよ!じゃな…！」

「じいちゃん!歳を忘れて踊り狂えよ…！」

「ああ…この日を待っていたんじゃよ…！」

誰もがジーク・ザ・ダンシングナイトを心待ちにしていた。

祭り当日…

その日は土砂降り、しかも運悪く国王がなくなり、國中が喪に服した。

「このことひて…」

「そー氣を落とすなオータム…次の機会にまたやるつな…」

その時、隣にいた助手が当然の質問をした。

「ところで、ジーク・ザ・ダンシングナイトってなんですか?」

ガラとバラ

ある診療中、助手のアリーがジークに尋ねた。

「オータムさんとジーク先生って知り合つて何年になるんですか？」

「なんだよ、いきなり…そいやもうずいぶん経つな。」

「診療所を始めたのはいつ頃だったんですか？」

「それは、もう10年ぐらい前だつたと思う。」

「オータムさんはそれよりも…」

「いや、後だつたな…思い出した…今年が20歳だろ！7年前だよ。」

「当時のオータムさんてやつぱり仕事できたんですか？」

「いやー、何やつてもダメでね。俺は最初は弟子だつたんだけどね、何度も先生に『辞める』つて怒鳴られてたもんだよ…」

「へええ… そうだつたんですか…」

「だけど、あいつの凄いところは辞めないで、次の日には怒られたことを忘れないで一つ一つ治していつたところだな。それで今のオータムが出来上がつたつてわけ。」

「なんか…ためになる話ですね。ジーク先生が弟子の時の先生は今どうしてるんですか？」

「さあてね…5年前に魔大戦が勃発してね、軍に魔術医師を徵収されたり、逃げちゃつたりで診療所から先生が1人消えて、2人消えて…ある夜誰もいなくなつていたつてわけ。」

「…」

「途中まで口スにも手伝つてもらつてたんだけど、あいつの留学があつてそれからはずつと一人で魔術医師やつてたな…オータムはずつと残つてくれたけどその時の助手も全員辞めちゃつたな。」

「…」

「なんか…しんみりしちやつたな…まあ仕事仕事。」

「…」

ある診療中…

オータムが、ジークの部屋に入ってきた。

「ジーク先生… ガラ先生が… 戻つてきました…」

「ガラ先生が… すぐ行く…！」

診療所に行くと、一人の男が廊下を見渡していた。

「ガラ先生…！」

「オータム、ジークか… 一人とも立派になつたな。」

「軍の医療施設の勤務は終わつたんですか？」

「ああ… ひと段落ついたよ…」

「あの… 奥さんは…」

「元気になつて、今では家族ごとの町に引っ越し越してきたよ。」

「てことは…」

「ああ。この町でまたお世話になるよ…！」

「やつたー！」

ジークとオータムはガラに抱きついた。二人とも目には涙を浮かべていた。

二人が抱きついていると、後ろからひょこっと背の小さな男が出てきた。

「バラ…！…めー何しに帰つて…」

そう言いかけたジークをオータムが涙目でジークを制止した。そして、目で訴えかけた。

「…くそつ！…バラ先生…おかえりなさい。」

そう答えたジークをオータムは精一杯抱きしめた。

「…いやあ、まあ俺がいれば1000人力だからな…！」

バラは得意げに話しかけてきた。

ガラがジークに囁いた。

「許してくれ。あいつも俺も苦しんでいたんだ。あんな戦争が起きて正氣でずっとやつてこられたお前が凄すぎるんだよ。」

「ガラ先生はバラとは違います。最後までこの診療所に残るうつし

てくれたじゃないですか。あいつは…あいつは…
「…すまない…」
「なんでガラ先生が謝るんですか！…」

困ったなあ

バラとガラが診療所に来て2週間が経つた。

診療所を建てたのは他ならぬガラだった。

さすがはガラは並外れた魔法力と豊富な経験で立派に診療をこなせた。

だが、バラは…昔から大した魔術医師ではなかつたが、今では昔とは比べ物にならないくらいレベルが落ちていた。

そのくせ、プライドは高く調子乗りだつたので弟子や助手からは大いに嫌われた。

ジークとオータムの診療中、オータムにジークが話しかけた。

「オータム…なんであの時バラを追い出さなかつたんだ？お前が一番バラにいじめられたじゃないか…」

「いじめられたなんて…あの人気がいたから今の私があるんです。それに、あの人はガラ先生の弟です。ガラ先生の気持ちを考えると…」
「…時々、お前の気持ちを考えると胸が痛くなるよ。もつと好きに生きればいいのに…もつと感情で人にぶつかつていければいいのに…つて。人のことばかり優先してお前を見ると…」
そういうつてジークはオータムの頭をそつと撫でた。

「ジーク先生…」

オータムは涙が落ちないように手をつぶつた。

ある診療中…

「バラ先生…早くしないと患者さん死んじりますよ…」
「つるさいなー…じゃあお前やつてみろよ…」

「…」

ジークがバラの怒鳴り声で駆けつけた。

「何やつてるんですか！？死にそうじやないですか…」

ジークがバラの怒鳴り声で駆けつけた。

そうジークは言い、呪文を瀕死の患者にかけた。

すると、患者の傷はたちまち治つた。

「バラ先生！ 今日のあなたの担当患者は軽症患者のみのはずです。重症患者なんてどうやって連れてくたんですか？」

「さあねえ……こいつが間違えて連れてくるもんだからなあ……」
はいい迷惑だつたんだがなあ……」

「……」

「まあ、お前なんていなくとも俺一人でこんなの治せたがな……」

「……」

ジークは黙つてその部屋を後にした。

その部屋の助手がジークの後を追つてきた。

「ジーク先生……」

「わかつてる……すまないな。バラ先生が何かやらかしたらまたすぐ
に呼んでくれ。」

月末日…

「おかしいな……」

助手の一人が首をかしげていると、オータムがそこへやつて來た。

「どう計算しても診療代が全然足りないんですよ……」

「そんな……ちょっと計算さして……」

オータムも計算してみるが、やはり3割ほど足りない。

「なんででしょ……困ったね。」

そこへ明らかに高そうな服や装飾品を身に着けているバラが歩いて
いた。

「オータムさん！ きっとバラ先生ですよ……」

「……あそこまでわかりやすく横領する人も珍しいわね……」
尋問しましょう！」

「いや……バラ先生とガラ先生がこの診療所を建てたんだから、本来
の人たちがいくら使おつと……しょうがないのよ。」

「そんな……」

「大丈夫…ジーク先生にはちゃんと報告するし、ガラ先生にも注意してもらつようにするから。それにあなたたちの給料だつてちゃんと払えるだけは残つてゐんだから。後は、金庫の暗証番号を変えましょうか。」

「…」

後日、ジークにオータムがこの件について相談した。

「バラ先生…本当に困つた人だな。」

「どうしましょう…」

「どうしましようつていわれてもなあ…ガラ先生に言つてもしガラ先生が責任感じて辞めるなんてことになつたら困るしなあ…

「困りましたね。」

「困つたなあ。」

ジークとオータムは困つた。

14歳で告白されて舞い上がる26歳

「困ったなあ……」

「何がですか？ジーク先生。バラ先生の件ですか？」

「いや……全然違うんだけどね……14歳の女の子に告白をねちやつしてね。」

「……何嬉しそうにしているんですか……！」

「うつ嬉しそうにしてるわけないだろ……！」

「14歳の子に告白されてレゲレしてたなんて犯罪ですよーーー！」の

犯罪者……！」

「おま……なんてことを……！」

「いこからさつをと断つてみること……！」

「わ、わかつてるよ……！」

ジークはその女の子と会つことにした。

「14歳の前はありがどひ……告白してくれてうれしかった。でもな、でも君とは付き合えない。」

「……どうしてですか？」

「いや……その君とは年齢も離れているし……」

「年齢なんて関係ないじゃないですかーー私もう大人ですよーー愛があればそんなの関係ないですよーーー！」

「いや……しかしだな……！」

「私……諦めませんからーー！」

そつ言い残して女の子は去つて行つた。

その話を後でオータムが聞き、あきれ果てた。

「ばかばかばかばか！！！！なんで年齢の話なんか持ち出すんですか！？そんなこと言われたらあなたがその子に未練があるみたいじゃないですかーー？」

「…だつて、恋愛対象じゃないなんて言われたらその子傷つくだろ…だから…」

「しようがないじゃないですか！？恋愛対象じゃないんだから…！何振つてもいい印象でいようとしてるんですか！？男なら振る時は悪者になるくらいの覚悟は持ちなさいよ！」

「…そんなこと言つたつて…あつ！自分でつて断りきれずにマークだかジミーだかわからない人とわけわかんない関係作つてんじゃん！」

「…今は私のことはいいじゃないですか…」

「でたよ…！でたよオータムさん！自分のこと棚に上げてそれはないんじやないですか！？」

「わ、私は…その…可能性があるじゃないですか！？まだ、その人と付き合うかもしれないじゃないですか！」

「好きなの？」

「…いえ…」

「ほりー絶対ないじゃん…！」

「ともかく…次はちゃんとビシシッと言ひなさいよ！」

そつ言い残してそそくひとオータムは逃げていつた。

廊下で歩いていると、その女の子がジークめがけて走つてきた。ジークは小さくつぶやいた。

「お前みたいな子供には興味ないんだ！お前みたいな…君みたいなお子ちゃんには興味ないんだ！…よし…」

その女の子は廊下の交差点でロスとぶつかつた。

ロスはぶつかつた女の子をお姫様抱っこで持ち上げて言つた。

「「めんよ…大丈夫かい？今ベッドまで運ぶから。」

「…はい…」

その女の子の目はハートになつていた。

一部始終を見ていたオータムは呆然としているジークの肩をポンポンとたたいた。

「オータム…」

「何も言わないでください。こんなもんですよ…今日は仕事終わったら飲みますか?」

「うん…」

歌が上手くなりたい

弟子の口スに元医療魔術研究所副所長のザックス、診療所創設者のガラのおかげでジークの仕事は昔よりも格段に楽になつていた。弟子たちも中々成長していく、診療所は本当に順調だつた。

弟子たちも中々成長していく、診療所は本当に順調だった。ジークには暇な時間がかなりできたので、本格的に歌を趣味にするべく活動を始めた。

ある時、ジーケの部屋に見知らぬ人が入ってきた。

「アーヴィングの死」

「はい。そうですか…患者さんのお受け付はあちらですか
量うしょ。今飲みつけ、お出でになります。」

さんのレッスン伺いました。

「えっ！あなたがテノーさんですか！よろしくお願ひします。」

ジークはそう言つてリズムに乗り、歌い始めた

「手ごわいですね。」

2 時間後

ପାତା ୧୦୦

「ちがーーーうー何度言つたらわかるんですかーーー」

תְּלִימָדָה בְּבִנְיָמִינָה

4 時間後

「なんで言つても治さないんですか！治さないなら私帰りますよ！」

ପରିବହନ ପରିବହନ ପରିବହନ ପରିବହନ

「違う！ ！ つてかひどくなつてるし！」

6 寺門後

ପାତା ୧୦୮

……余のラジオは立派で立派なラジオ

「先生ご指導ありがとうございました。一生懸命やったがどうでしたか?」

一伸ひしろかない……

「六」

「あなたは歌の才能がありません。最初は下手だと思いました。ですが、あなたはタダのへたくそじやありませんでした… 今後あなたは少しも上達しないでしょう。」

「才能があ

探しの方が多いでしょう。」

その夜ジークは人知れず泣いた。

「ジーク先生！また、バラ先生がお酒を飲んだまま治療してしまった！！」

バラと一緒に治療を行っていた弟子がジークに報告してきた。

「またか…わざわざありがとうございます。」

「ジーク先生…こんなこと言いたくないんですけど、バラ先生は…「わかつてゐるから…言わないでくれ…」

次の日、ジークはバラが診療している部屋へ入つて行つた。

「バラ先生…酒臭いですよ。酒飲んでますよね？」

「ちょっとだけだ！ちょっとだけ！！治療には影響ない。」

「…影響があるうとなからうと診療所ではお酒は控えてください！…「…テーマーーー！誰に向かつて口聞いてんだ！俺はこの診療所創設者だぞ！」

「…」

「お前に医療魔術のイロハを教えてやつたのも俺だし、色々世話してやつたのも俺だ！今後は口のきき方に気をつける！」

「…」

その夜、オータムの部屋へジークが入つて行つた。

「オータム…ちょっとといいか？バラ先生のことで話があるんだけど

…」

「はい。あの人にも困つたもんですね。」

「…昔はあんなにめちゃくちゃでもなかつたよな？」

「そう…ですね。」

「もともとは「」の創設者だし、高い志を持った凄い人だつたんだよな…」

「…はい。」

「やっぱり…あの人…が…歪んだ原因は俺とガラ先生かな？」

「ジーク先生とガラ先生が悪いわけではないと思います。ただ…原因はそこかと…」

「そう…だよな…」

「ここ」の創設者だらうと…ジーク先生なら追い出せると思います。何せ5年間一人で頑張ってきたのはジーク先生ですから。」

「いや…口スラとロー・ティー・ション組んで監視するよ。ミスしたらフォローできるように…お前ら助手たちには迷惑かかると思つけど…いいかな?」

「…私はジーク先生の判断に従います。」

「…悪いな」

バラ先生をフォローする特別シフトが組まれた。

記念日（一）

「オータム。1週間後ってどうする？」

「えっ！もしかして…覚えてたんですか？」

「え、うん。一応、ロス、ザックス、バラ先生、ガラ先生集めてやるうつと思つてるんだけど…」

「いや…本当にありがとうございますけど、みんなに集まつて貰つほどのことでは…。」

「じゃあ、俺とオータムだけでいいか？」

「ええっ！は、はい！！わかりました。」

「時間は…19時くらいでいいかな？」

「…わかりました。楽しみにしていますので。」

「えっ？ああ、楽しみだよな。場所は当口恤つから。じゃあそーゆーことで。」

オータムが部屋を出ていった後、ジークは呟いた。

「新助手の面接が楽しみなんて…やっぱりオータムたち助手の仕事は大変なんだな。」

一方、オータムは二コ二コしながら廊下を歩いていた。

すれ違う助手のアリーがオータムに尋ねた。

「オータムさん、何かいいことあつたんですか？」

「えっ！いや…実はジーク先生が1週間後のこと覚えててくれてね。」

「1週間後？…その日つて何の日でしたっけ？」

「いや…完全にプライベートなことなんだけど、1週間後は…私がこの診療所で勤めて7年目なのよね。」

「へええ…そんな日覚えてるなんて…ジーク先生やりますね！」

「毎年やつてるわけじゃないんだけど、1年目、3年目はロス先生が主催でやつてくれてね。5年目はサリーがやつてくれたから実

はひそかに期待して…

「なんにしても、嬉しいですよね。」

「うん…」

オータムは無邪気な声でつなづいた。

6日後：

ジークと助手が診療室で治療していると、助手がジークに話しかけた。

「ジーク先生！明日ですね。」

「明日？ああ、オータムに聞いたの？そうだよ。」

「オータムさんの記念日を覚えてるなんて、中々やりますね？」

「記念日？何の？誕生日なら覚えてるけど…」

「えっ！だつて明日はオータムさんがこの診療所に働いてちょうど

7年目の日でしょ？」

「…何それ？明日は新助手の面接日だよ。」

「…！もしかしてオータムさん凄い勘違いしてるかも…」

「そーかー。だからオータムと話した時、嬉しそうにしてたのか…

「なんでそんなに冷静なんですか！？」のまじやオータムさんが

つかりするじゃないですか！」

「ショーガないじやん。勘違いなんだから…正直に話せばわかつてくれるだろ。」

ジークは休憩時間にオータムの部屋へ行つた。

ジークが部屋に入ると、オータムはいなかつた。

しかし、いかにも高級そうなドレスがきれいにハンガーに掛けられていた。

ジークはすぐにオータムの部屋をあとにし、診療室に戻り、アリーに言った。

「どーしょー…めぢやめぢや『氣合』に入つてる。」

「どーするんですか！どーするんですか！…どーするんですか！？オータムさんめぢやくぢやガツカリするじやないですか！？」

「でも！…だいたいそんな口があんまりわかなことじん…。」
「…最低」

「ビーしょー！非常に困った。プレゼント探す時間なんかないよ。」

「とりあえずロス先生に相談しては？」

「…そーだなー。」

ジークの仕事の時間が終わり、ロスが交代勤務で診療室に入つて来たので相談することにした。

「ロス…オータムのことなんだけ…」

「ああ…さつき話したよ。新助手の面接のことじょ？」

「えつ…？…オータム何か言つてた？」

「いや…『兄さんに新助手の面接の時間聞いたけど、19時からなら、俺も参加できるから行くよ』って言つたら何か考へ出して…」

「それで！？」

「いや…『わかりました』って笑顔で言つてたけど…」

「…ビーしょー。完全に怒つてる…」

「何かあつたのかい？」

「いや…実は明日はオータムがこの診療所に勤めて7年目なんだ…」

「うん。知つてるよ。」

「えつ！お前知つてたの？」

「だつて1年目と3年目は祝つてたでしょ？今回も驚かせてやつと思つて内緒で数人の弟子たちに密かに準備させてるよ。」

「なーんで俺にも言つてくれないんだー！？」

「いや…特に理由はないけど…兄さんは多忙だし助手には口が軽いやつがいるし…」

「そーか…わかつた。ありがとうな。」

ジークは結局オータムに謝るしかないと思い、部屋へ行つた。
ノックしたが返事がない。

部屋へ入ると、オータムはベッドに包まつてこた。

「オータム…あのわ…」

「なんで返事がないのに入つてくるんですかー…出でつてください…

…」

「明日のことなんだけど…」

「新助手の面接が19時からあるんでしょ…ちゃんと覚えてますよ

…」

「いや…記念日のことなんだけど…」

「…誰から聞いたんですか？」

「…アリーから…」

ジークは弱弱しむづな声で言つた。

すると、オータムは起き上がりジークを見た。

ちよつと田には泣いた跡があつたような気がした。

「1めん。」

ジークがそー言つと、オータムは手を両手に重ねて思いつきつみを
おちに両手をぶち込んだ。

「あ！」は……！」

ジークは思わずそんなつめき声がとびだし、みぞおちを抱えてつづ
くまつた。

オータムはうずくまつて、このジークを見て言つた。

「これで許してあげます。」

ジークは苦しみながらも言つた。

「ちゃんとパーティーは聞くから…」

「私は…！…パーティーをして欲しいから怒つてるんじゃないんで
す！」

「じゃあ…なんで…」

「もーいー！…出でつてください。」

オータムはそっぽを向いた。

その時のオータムの肩は震えていた気がする。
突然、ジークはオータムの肩を抱いた。

オータムはびっくりして言った。

「ば、なななにするんですか！？」

「お前には本当に感謝してる。俺が今ここにいるのはお前のおかげだよ。」

「…」

「ただ、ルーラー記念日とかには無頓着で…本当に「めん。」

「…」

「…」

「…あの…もう少し…でもらって…いい…ですか？」

「…」

「…」

「…」

それから2分くらい経つた後、部屋にノックがした。
2人はノックにびっくりして即座に離れた。

結局、ロスは毎回にサプライズパーティーを開いて、オータムはとても喜んだ。

19時には新助手の面接があり、2人を採用した。

ジークとオータムはお互いを少し意識していたのか口数が妙に少なかつた。

ザックスヒーラー

ある夜、ザックスは辺りを見渡しながら、都会のベンチで座つていた。

そこに、助手のヒーラーが来た。

二人はあたりを見渡して誰もいないことを確認すると手をつないで歩き出した。

喫茶店で食事をしながら一人で雑談をした。

「まさか、君とこんなことになるなんてね…」

「はい。私もすぐ驚いています。」

「でも…当分みんなには知られたくないよね。」

「同感です。知られたら面倒なことになりそうだし、ザックスさんは人気がありますから！」

そういうヒーラーの個人的な見解を言つたが、ザックスはまんざらでもなさそうだった。

「でも…ザックスさんはいつかは…国に帰つてしまふんですね？」

「うん…でも当分先の話だから…ここで学ぶことは多いしね。」

「どんなこと？」

「まず、ジーク先生だね。ロス先生と肩を並べる人がこの世にいるなんて驚きだつたよ。それに、ガラ先生も凄い人だね。あれだけの魔術医師はうちの国でも居るかいなかだね。本当に凄い場所で働かせてもらつているよ。」

「そうですね…本当に凄い人たちですよね。ザックス先生も含めて

…

「ここつー…」

「ええー！本当のことだもん！」

「あと、なにより一番の理由は目の前にあるからね。」

「もー…何言つてるんですか！？」

「いやいや、眞実だから仕方ないよー。」

ラブ ラブな二人であつた。

3か月後…

ロスがザックスの家へ行つた。

ノックをすると、ザックスが大きな声で言った。

「カモー——ン！」

ロスは部屋に入ると、まず、玄関にはバラの花びらがまき散らされていた。

奥の部屋に入ると、ザックスが裸で立ちはだけて待ち構えていた。

ロスは面を食らつて叫んだ。

「お、お前！ 何やつてんだ！！ 早く服着ろよ——！」

「す、すいません。まさか、ロス先生だとは。」

「誰がくると思つたんだ？」

「いや、実はいつも僕は裸で過ごしていまして…」

「…で、裸で人を出迎えるのか！？」

「…たまには皆を驚かせたりまして。」

「…変な趣味だな… 辞めた方がいいよ。」

「…はい。」

「バラの花びらがまき散らされているのも趣味なの？」

「…バラの花がとにかく好きなんですか！… 好きで好きで…！」

「ふーん。」

「…と、ところで今日は何の用事でいらっしゃったんですか？」

「いや、そーいえばザックスの家に行つたことなかつたから。で暇だつたから。」

「…そーですか。」

「…何か予定あつた？」

「いえいえいえ！！ 何もありませんともー！」

ロスはあたりを見渡した。

「化粧道具なんかが置いてあるけど…」

「……！そつそれは……」

「自分で使うのか？」

「……は、はい。」

「えつ！本当に自分で使うの！？」冗談で言つたのに……」

「……実は女装が趣味なんです。」

「そ、そつか……まあ趣味は人それぞれだしね。てっきり女性と暮らしているのかと思つたけど。」

しまつた

ザックスは今頃気がついた。

別に相手がリースだと気づかなければ女性と暮らしていることを隠さないでもいいことを。

しかし、ザックスはとんでもなく強情な人間なので今更訂正はできなかつた。

ロスは言つた。

「じゃあ、そろそろ帰るわ。」

「は、はい。あのロス先生……このことは……」

「わかつてゐる。誰にも言わないよ。」

「本当にありがとうございます。」

ロスは帰つて行つた。

30分後……

ザックスの家に誰かがきた。

ノックの音がしたのでザックスは言つた。

「カモ——ン！！」

ザックスが裸で立ちはじめると、扉から人が入つてきた。なんと再びロスだつた。

「ちょっと忘れ物して……だから裸で出迎える癖は治せつて。」「も、申し訳ありません……我が国の伝統でして……」

弟子たちの様子

弟子たちが診療所に来て、そろそろ1年が経とうとしていた。

優秀な弟子たちはすでに重症患者の治療も行っていた。
しかし、優秀であればあるほどジークやロスなどとの壁が大きく立ちはだかっていた。

ラリーもその一人だった。

ジークがラリーの治療に付き添っているとき、ジークがラリーに対して言った。

「見事だ。お前にはそろそろ魔術医師の免許をあげてもいいかもな……」

「……どこが見事なんですか。先生は同じことが1日に何千回とできるじゃないですか。僕はこの1回だけで魔法力をほとんど使っていました。」

「バカ！俺やロスがどれだけの患者を治してきたと思つて！君らとは治している患者数が違うよ。君たちも修羅場をぐぐつていけば俺たちぐらいにはすぐになれるよ。」

「そうでしょうか……」

「絶対だ！」

ラリーが出ていった後、そばで見ていたオータムはジークに言った。

「ラリーを引き留めようと必死ですね。」

「ラリーは優秀だからな。自分の限界がどうしてもわかつちゃうんだろうな。」

「自分の限界を知つても、続けると？」

「あいつが知つての限界なんてまだまだ甘いよ！限界はまだまだ先にあるんだ。それを知つたらきっとどちらが上かなんて気にならなくなるよ。」

次に教える予定だった弟子のサシヤが入ってきた。

「ジーク先生！私だつてそろそろ重症患者やれます。」

「ダメ！！絶対だめ！！」

「先生は私の才能に嫉妬しておられるんだわ！なんて醜い…」

オータムにジークが呟いた。

「ほらね。こーゆー何も考えてない楽天家が残つたりするんだよ。」

「また、お母さん來たんですか！？」

ロスはあきれながら言った。

「だつてチャちゃんがいじめられてないか心配で…」

「あなたがこう頻繁に來ては皆から逆に変な目で見られてしまいますよ。なんで毎日毎日來るんですか！？本人のためにも全くよくないことですよ！…」

「だつて私チャちゃんが心配で…」

「いいですか！？今後チャとお母さんが接触するのは週で2回までとさせて頂きます。それ以外は一切この診療所には来ないでください！」

「そんな…チャちゃんがいじめられて自殺でもしたらいどうんですか！？」

「一生あなたが付いていてはチャはいつまでたつても成長しません。」

「でも…」

「わかりましたか！…」

「…わかりました。」

「…では今日はお引き取り下さい…！」

「ええつ！…今日からですか！？」

「はい！」

「わかりました。」

30分後…

ロスによる診療講座中、何かに気づき、急にロスは壁に向かって呪文を唱えだした。

すると、チャの母親が姿を現した。

「お母さんー！透明になつたつて駄目です！！」

「透明になつて見守るぐらいいいじゃないですか！？」

「ダ・メです！…お引き取り下さい。」

2時間後：

ジークが見守る中、チャの重症患者の治療が始まった。

チャが魔法を掛けると、重症患者の傷は塞がつていつた。

ジークは何かに気づき窓のそばにいる鳥に向かつて呪文を唱えた。すると、チャの母親が姿を現した。

「お母さん…なんでチャの代わりに呪文を掛けてしまふんですか！？」

「チャのためにならないでしょ！？」

「だつてだつてチャちゃんができない風に思われるのには耐えられないと！」

「そんなことやつたらチャは何時まで経つても成長しないでしょ！…お引き取り下さい。」

そんなやりとりが後5・6回続いた。

そして2日後…

ザックスが見守る中、チャが重症患者の治療に呪文を掛けた。すると、重症患者の傷が見る見るうちに治つていった。

「凄いじゃないか！…自力で治すなんて大したもんだ！…！」

チャは頬を赤らめながら頷いた。

同じく弟子であるサシャがふざけてこんなことを言った。

「また、お母さんがどつかに隠れてるんじゃないのーー？？」

周りからドッと笑いが起きた。

ザックスはサシャを睨み、こう言った。

「サシヤ……私は一流の魔術医師だよ。私の目をかいぐぐれる魔法使いなんて……あれ……」

ザックスは何か違和感に気づきその場所に魔法をかけた。するとチャの母親が飛び出してきた。

その叫び声と同時に一段と大きな笑いが起きた。

そして、チャが突然叫んだ！！

「もーたくさんだ————！」

「……」

そ一叫びながらチャの母親はチャを追いかけた。

2 時間後

結局、チャは見つからず、治療している者以外の血で検索する」と
になつた。

けた。

「やれやれお母さん… 今回は失敗しましたな。」

私は
：

「どれ… 聞かせてはもらえないでしょうか？」

「あの子は8年前に死にかけたことがあります。大戦が起きる前でしたが、盗賊団と防衛隊との魔法弾に巻きこまれて……」

「あまりの傷にびの魔術医師たちも一齊に匙を投げました。私はこの子の命を一回諦めました。」

「8年前」

「覚えてらっしゃらないでしょうね…奇跡の魔術医師がいるというかすかな希望にすがって来た一人の母親のことなんて…」

「なるほど… そうでしたか…」

「九死に一生を得たあの子を… 私はずつと守っていました。またあの子の命を諦める』ことになると… ずっとあの子を守つていよつて。」

「… 不思議とチャは私にだけは心を開いてくれていましてな… なんで魔術医師になりたいかを聞いたことがあつたんです。」

「… あの子はなんて？」

「『僕は今までずっと母さんに守られてばかりだった。これからは母さんを守れるような人になりたい』 そうですよ。」

「子供の成長は著しいものです。やがてお母さんも息子さんに抜かれる日がやつてくるでしょう。その日を心待ちにするのは… ダメですかな？」

「…」

「あつ、もうそつこい忘れたことがありました。8年前にある子供を治療した時子供がこんなことをこつていていたんです。『お母さんは大丈夫？』 つて。もしかしたらその子はお母さんを守りつとして魔法弾にあたつたのかもしませんな…」

「…」

結局4時間後チャは見つかり、ガラ先生がチャをなだめていつたんは落ち着いた。

チャの母親はそのことがあつて以来あまり顔を出さなくなつた。

あるガラ先生とオータムの治療の時、オータムはガラに向かつて話しかけた。

「ガラ先生はやつぱり凄いですよね。あんなに自分のことをじゅべらないチャから色々と聞き出していたんですね。」

「いや… 心は開いてくれたけど、何も聞いてないよ。」

「えつ… じゃあ、あの話は全くの嘘なんですか！？」

「嘘じやないよ…あの子の心がそう言っていたんだよ。」
そつ言つてガラはオータムに笑いかけた。

サシヤ ンの過去

横に立っているエリーは最も愛している人で、50年後もずっと同じで・・・

その人はほんとにほんとに素敵な人で、ほんとにほんとにほーんとに！！

いつからかそれが夢に変わつてた。

でも、ずっと好きだつたエリーの隣にいるのは親友のゲラーで・・・

サシヤ ンはそんなことを考えながら、結婚式場にいた。

ばか！..せつかくの友達の結婚式だぞ！..心から送り出してやらんと・・・

そーは思つていても中々それが頭から離れない。

「ここでなんと新婦のエリーさんから新婦のゲラーさんにサプライズが！！

なんと手紙を用意してくれたそうです。」

ゲラーはびっくりしながらもうれしそうに立つていた。エリーさんが読みあげる

「ゲラーへ・・・最初に会つたときは今ここであなたが私の横に立つてゐるなんて想像もしませんでした。最初のあなたはとても怖そうでなんか近寄りがたかったよ。でも、それはあなたが不器用だからだつたんだよね。だんだんあなたのことが分かつてきてあなたが本当はすごく優しくて暖かい・・・」

大体こんな内容だつたかな。確かにゲラーはいい奴だよ。でも「かつこいい」って言うのが抜けてないかな！..そこがないと好きにならないでしょ普通。だつてやさしくて暖かい奴なら大多数がそーでしょ。俺だつて君にはすごく優しかつたし、てか最初からやさしかつたし・・・いやもうやめろ俺！..せつかくの披露宴だぞ！！エリーが続けて読み上げる、

「私が親とケンカして家を出て行つたときも、一番最初に私を見付けてくれたよね・・・」

あの時はえらい騒ぎになつたな・・・親から行方不明になつたつて連絡が来て、

36時間くらいぶつとおしで探したつけ・・・結局君がゲラーに手紙を送つてゲラーが迎えにいつたんだよね。それを見付けてくれたというのならもう何も言つまい・・・（ゲラーは心配なつて探さなかつたけどね！！）

ハーああ・・・自分でもこの性格がいやになる。せつかくの友達の結婚式にこんないやなことをかんがる自分がさ・・・

ゲラーが突然立ちあがり、大きな声で言つた。

「ここので重大な発表があります！なんと私たちは子供を授かりました。名前はガラとつけようと思つています！」

「シャーンさん！..サシャンさん！..起きて下さい！..」
サシャンはガラに起された。
「授業の途中ですよ。今寝てもらつては困ります。」
「ああ、夢か..わしゃ夢を見とつたんじやな..」
「...何の夢かは知りませんが、すごく悲しそうな顔してましたね..」
「...なに、一人の女性を諦める夢だつたんじやよ！ほつほつ..ガラ
..大きくなつたの..」

親父——！

診療所に見知らぬ年配の男性が入ってきた。

助手のアリーはその男性に聞いた。

「ここにちは。どうかされましたか？」

「あの……ジークとロスの父親のジャスという者ですが……」

「えつ……ジーク先生とロス先生の！？すぐに連れてきますね……！」

10分後……

「父さん、一体どーしたんだい？」

「いやーたまには息子たちの顔をみないとと思つてな……元気だつたか？」

ロスとジークは顔を見合させた。

「父さん……何を企んでるんだい？」

「いや……何にもないよ！本当に今回はお前たちの顔を見に来ただけだよ。」

「そうか……」

「あつーせうだそうだ……ついでに母さんからこれを頼まれていてな……」

ジャスは山のような絵を呪文で出した。

「……これは？」

「おまえらのお見合い写真だ！！みんないい人たちばっかりだぞ！」

「！」

「……どうせそんなこつたらうつと思つたよ……！」

「よし！ロス、お前に任せる……」

「そんな……卑怯だよ兄さん……順番から言つたら兄さんが先だろ！……兄さんがお見合いしなよ。」

「こや、俺はいろいろ忙しいしな……」

「俺だつていろいろ忙しいよ。」

2人がそうやつて揉めていると、ジャスはぴしゃりと言つた。

「二人とも一つずつ選んで、お見合いしなさい。」

「…」

ロスとジークはどのがいいかをお互いに探すこととした。

「ロス…この子なんかタイプなんじゃないか?」

「うーん。趣味が全然合いそうにないなあ…兄さんこの人は?」

「うーむー。お嬢様育ちがぬけてなさそうだもんな…」

「…」

二人とも中々決まらなかつたが、お互に2枚絵を選んで会うこととした。

レストラン「スプリングフェアリー」にて…

ジークはそわそわしながら待つていた。

すると、絵とは大分…いやかなり違う女性が目の前に立つていた。ジークはさすがにこの人はないなと思い、また、外のドアの方を気にしだした。

しかし、その女性はジークの席にドシッと座つた。

その女性が座つた瞬間、ジークの持つているコップがかすかに震え始めた。

その斜めに座つてゐるロスはとりあえず胸をなでおろした。

その女性は、ジークに向かつて言つた。

「…ロス先生ですか?」

その瞬間、ロスの椅子がガタッと音を立てた。

かたや、ジークは笑顔でロスの席へその女性を案内した。

「ロス先生…よろしくお願ひします。」

「…こちらこそよろしくお願ひします。」

ロスの持つている「ツップもまたかすかに震え始めた。

「…双子の姉も、もうすぐ来ると思いますので…」

今度はジークの椅子がガタツと音を立てた。

結局4人は会話も弾みいい友達になれたが、ロスとジークはその絵と全然違つたことは凄く納得がいかなかつた。

くそ親父ーーー！

ジャスが診療所に来て一週間が経つた。

ジャスはジークやロスの診療の様子を見に来たり、待合室で患者と雑談したりしていた。

ジークとロスは父親が来た理由がいまいちハッキリしなかつたのでお互に首を傾げていた。

オータムが久々の休日でくつろいでいると、ノックの音がした。ドアを開けるとジャスがいた。

「オータムさん…あなたに話があります。」

「はい、何でしょうか？」

「将来、あなたはどちらかの息子と結婚する気はありますかな？」「結婚！！いやいや全然そんなことは考えていませんけど…」

「…ですか…失礼します。」

アリーもまたくつろいでいると、ノックの音がした。ドアを開けるとこれまたジャスだった。

「アリーさん…」

「は、はい。」

「将来、あなたはどちらかの息子と結婚する気はありますかな？」「け、結婚ですか。…その…」

「わかりました。失礼します。」

サシャの部屋にもジャスは来た。

「…どうしたんですか？」

「あなたは、息子たちのどちらかと結婚する気はありますかな？」

「…ですか…2人ともどうも私を見る目がいやらしいと思つていました。でも、私はあんな男たちに捕まるほど軽い女じやありません

せんよ！

「…そ、そつですか…」

結局ジャスは診療所中の女性に同じ質問をした。

「父さん！ 一体何考えてんだよ！？」
その話を聞いたロスとジークがジャスの元へ向かつた。

「ロス、ジーク……父さんな……」

「な、なんだよ…」

「父さん……孫が欲しい……」

1

「モニタ」

۱۷۰

「うんじゃないよー！なんだよそれー！孫なんか父さんが頑張つた

「それでわざわざ来たんだ！」

「『『海へ、いふ　じめに　阿善』」

「でも、なかなか難しいことがわかつたよ……誰もお前たちと結婚

たいとは思つてないみたいだつたよ。」

- 1 -

なんか少し傷ついたロスとジークだつた。

いつものように診療が終わり、オータムは後片付けをしていた。すると、いすの下から毛布にくるまつた赤ん坊が出てきた。

「えらいこいつちや…」

オータムは呟いた。

「どーする…」

「どーしましよう…」

「どーしょーか…」

皆がその赤ん坊の前に集まり、悩んだ。

オータムがその赤ん坊を抱いて、あやしている。

ジークがその姿を見て、呟いた。

「可愛いな…」

「本当ですね。私もこんな可愛い赤ちゃんを産める時がくるのかな

…

結局、その子は国の保育所に預けることが決まった。

オータムは少し悲しそうに言った。

「今日は…私がこの子と一緒に寝てもいいですか？」

その夜、ジークはなぜだか眠れなかつた。

オータムと赤ん坊のことが気になつて、部屋の前まで行つた。

ノックしようとしたが、すぐ下手くそな…でも優しい子守唄が聞こえてきた。

ジークはそつとドアを開けた。

オータムがジークに気づいた。

ジークはオータムの横に座つた。

オータムは赤ん坊の顔を見ながら言った。

「やつと寝ました…」

「可愛い寝顔だな。」

「はい。」

「…大丈夫か?」

「何がですか?」

「なんか…様子変だつたから。」

「…」

「…」

「ジーク先生は知つてますよね。私が孤児だつたことは…」

「うん。」

「両親に捨てられて、それからはずつと一人で生きてきました。この診療所に入つた時もずっと一人だつて思つてました。」

「…うん。」

「でも…やつぱり7年も一緒に過いじてると、みんなが本当の家族のように思えてくる時があるんです。」

「…うん。」

「でも、みんなには本当の家族がいて…そんなとこ見ると胸がキューッと痛くなつて…」

「うん。」

「…」

「オータム…でもな…」

そうジークが言いかけるとジークの首にこいつるとオータムの頭が当たつた。

ジークはオータムをそつとベッドに寝かせて部屋を出ていった。

結局、その子の母親は赤ん坊の元へ戻つてきた。
オータムはめちゃめちゃその母親を叱り、最後には少しあびしそうに赤ん坊を返した。

「…

ジークが一人考え込んでいるのを見て、オータムが声を掛けた。

「どうしたんですか？ジーク先生。」

「いや…今頃ラーマさんはどうしてるんだろうと思つて…」

「今更どうしたんですか？」

「…俺のことどう思つていたんかな…」

「だから今更どうしたんですか？」

「会いたいな…」

「…会えればいいんじゃないですか。」

「…うん。ちょっと会つてくるわ。」

「仕事終わつてからにしなさいね…！」

仕事終わり…

ジークはラーマが働いている雑貨屋に行つた。

ドア越しにラーマは笑顔で客に接客しているのが見えた。

やつぱり可愛いな

ジークは改めて思った。

そしてジークは雑貨店に入った。

ラーマは最初驚いた顔を見せたが、すぐに笑顔で言つた。

「お久しぶりです。」

「久しぶり。」

「お元気でしたか？」

「…うん。ほちほちね。ラーマさんは？」

「はい。元気でやつていますよ。」

「…やつ…よかつた…あつ今日は買いたいものがあつて…」

そう言つてジークは適当に雑貨を買い込んだ。

その間、ラーマとの会話も弾んだ。

帰り際、ラーマがジークに言った。

「ジーク先生…私…結婚するんです。」

「…そつか…おめでとう。」

「ありがとうございます…」

「あのさ…いや…なんでもない…幸せにな。」

「はい。」

ジークは雑貨屋を去った。

翌日…

オータムがジークに尋ねた。

「結局、なんでラーマさんのところにいったんです?」

「別に理由はないよ…昔好きだった人に会いたくなつて。」

「どうでした?久しぶりに会つて…」

「きれいな人だつて思つたよ。」

「だから好きになつたんでしょう?」

「まともに顔が見れたのは、最初の数回だけだつた気がする。あと

はドキドキしてな…」

「恋愛経験小学生並ですものね。」

「つるさい。お前もだろ!」

「…」

「…」

一人してため息をついた。

カルチャーショック（なぜ抱きしめる？）

診療所に一人の男が入ってきた。

その男は受付に行くや否や受付の助手にハグをした。

「な、何するんですか！？いきなり！？」

「私、西の大陸で魔術医師をやつているモズといいます。放浪し医療魔術を学んでいましたが、この診療所の噂を聞きつけ是非ここで医療魔術を学ばせて頂きたいと思いやつて来た次第です。」

「そ、そうですか…」

助手は戸惑いながらも、ジークを呼びに行つた。

ジークはモズの元にもうダッシュで駆けつけて言つた。

「うちの病院は来る者拒まずだから！歓迎するよ…早速実力を…ちょ、ちょつと…なんで俺をいきなり抱きしめるんだい？」

「ああ、言つのが遅れまして…西の大陸の私の国は挨拶にハグをするのが風習でして。この国ではそつ言つた習慣はないみたいですね。」

「ふ、ふーんそなんだ…とりあえず、今ちょうど治療しててる最中だから俺の代わりにやつてみてくれ。」

ジークはモズを代わりに治療させた。

治療の腕はまさに見事で、どの優秀な弟子より上だった。かなりの魔術医師であることがわかつたのでジークは即採用しようと声を掛けた。

「見事な腕だよ…是非うちに…ちょつと…患者さんを抱きしめないで。」

「すいません。私の国ではこれが普通でして…」

「そ…そ。あの…採用なんだけどちょつと俺だけじゃ決めかねるから今日みんなと相談するよ。それまでは診療所の部屋に泊まつてよ。」

「わかりました。よろしくお願ひします。」

モズは、ジークに熱いハグをした。

主な魔術医師、助手が揃つた。

「すでに知つてはいると思うが、モズという優秀な魔術医師が採用を求めてきた。是非採用したいのだが、その…西の国ではすぐにハグする習慣があるらしくて…」

「…俺もされました。」

「私も。」

「俺も。」

ほとんどの人がハグされていた。

「国の習慣だから…なんとか尊重してやりたいんだが、みんなどうかな？」

ジークの答えにみんなが頷きかけたその時、助手のアリーから信じられないような話を聞いた。

「でも…なんか友達になつたらハグだけじゃなくキスもするつて聞いたんですけど…」

「キ、キス！…」

全ての人がざわついた。

「よ、よし。キスは絶対にやめてもらつて」とで…

その意見に満場一致で決定した。

モズの元ヘジークが話に行つた。

「君を是非採用したい。」

「本當ですか！ありがとうございます。」

モズはジークに熱いハグをした。

「ただ…友達になつたらキスをするつて聞いたんだけど…それはちよつとこの診療所では辞めてほしいんだけど…」

「キスですか！？いくらなんでも友達にそんな」とはしませんよ。」

「そーなんだ。そーだよね。」

ジークの声が軽くなつた。

モズは続けて言った。

「キスをするのは親友と呼べるくらいの人だけですよ。ただの友達にはできませんよ！」

「…そーなんだ…あ、断つとくけど、うちは上下関係は厳しいから！たとえば君と俺は先輩と後輩という関係で友達感覚で接しないように！そこだけ注意して！！」

「は、はい。わかりました。」

かくしてモズが採用されることとなつた。

キス作戦

モズが診療所で働くようになつてから、2週間が経つた。

モズが挨拶代わりにハグをやたらとするので、周りの人はよく噂した。

「今日も私ハグされちゃつた。しかも5回も！！」

「私なんか一日中助手だったから何十回もハグされちゃつたわよ！」

「その習慣ちょっとおかしいわよね。」

「やめてほしいよね。」

周りの人たちがそう噂する中、一人だけモズをかばう人がいた。

「ちょっと！！国の習慣なんだからしようがないでしょ！」

誰かと思えば弟子のサシヤだつた。

サシヤはハグだけでなく、なんとか親友になつてキスできないかなと考えていた。

そして、サシヤの親友になろう作戦が幕を開けた。

作戦1 困り作戦

「モズ先生！あのー教えてもらいたいことがあるのですが…」

「モズ先生…」

「モズ先生…」

1日に100回くらいサシヤはモズに質問した。

そのたびにハグを受けた。

モズはいつも笑顔でサシヤに接した。

作戦2 相談作戦

「モズ先生…あのー相談があるのでですが…」

「なんだい？」

「ずっと、変な人に付きまとわれてて困ってるんです…」

サシヤは架空のストーカーを作り上げてモズに相談した。

モズは本気でサシヤを心配して可能な限り、サシヤを家まで送った。

「中々、ストーカーは姿みせないね…」

「えつ…そ、そうですね…お、おかしいなあ。」

作戦3 お礼作戦

サシヤは何かにつけてお礼をした。

「モズ先生！この前はありがとうございました。明日お詫びにおこりますよ。」

「いやいや俺は大したことしてないからいいよ。」

「…迷惑でした？」

「い、いやいや迷惑だなんてとんでもない。」

「よかつたーーー！いいお店知ってるんですよーー！仕事終わり迎えに来ますね。」

「…はい。」

「…はい。」

その他さまざま作戦をサシヤは行って、モズの手を煩わせているがモズはいつも笑顔で接しているようである。また、サシヤの実力も飛躍的に伸びた。

第一回イベント会議

モズという優秀な魔術医師を採用したので、週に1回は休みがとれるようになった。

ジークは診療所で何かイベントをやりたいと考えていた。

早速、オータムに相談を持ちかけた。

「オータム、何か患者さんたちが喜ぶようなイベントをやりたいんだけど何かあるかな？」

「イベントですか…そうですね…一度みんなを集めて相談しますか？」

「そーだな。こんな時間が作れるなんて昔では想像さえできなかつたな…あーウクワクしてきた！」

第1回イベント会議にて…

「えーみなさん本日は集まつていただきありがとうございます。何かこの診療所でイベントなどできたらいいなと思い、今日は集まつていただきました。何か意見のある人はいらっしゃいますか？」

「なんで、そんなことやる必要があるんです？」

「ちょっと…面倒くさいよねー…」

「ねー」

最初はそんな意見が目立つたが、ジークがその意見を言つたやつを凄い形相で睨むので、その人たちは次々と口を閉ざした。そんな中、モズが口を開いた。

「私の国では、裸祭りというものがあるので…」

そういったとき、女性陣が凄い形相でモズを睨んだ。

男性陣は賛成したがつたが、あまりに女性陣の顔が怖かつたので賛成する勇者はいなかつた。

「合唱なんてどうですか？」

アリーが言った。

「合唱か…」

ジークや昔からいる助手はオータムを見た。

オータムは顔を赤らめたまま下を向いている。（歌が下手すぎるため）

合唱がなかなかいいんじゃないかと言つ意見が結構多かつた。

「じゃあ合唱で決まりで。ダメだと思つひとがいたら手を挙げてください。」

誰もいなかつたので、合唱に決まった。

「じゃあ、ピアノから…誰かピアノをやりたい人…！」

オータムと魔術医師のバラが手を挙げた。

「2人ともピアノ経験は？」

「ピアノ演奏者か魔術医師か…どちらの道に選ぶか迷つた男だぜ！」

「俺は…！」

ピアノ演奏者を選べばよかつたのに

かなりの人がそう思つた。

かたや、オータムは恥ずかしそうに言つた。

「私は…ゼロです。」

「じゃあ…バラ先生で決定です。」

指揮者選びの時も、オータムと魔術医師のザックスが手を挙げた。

しかし、オータムは同じく未経験者のためザックスが選ばれた。

「じゃあ、パートを分けようと思います。」

オータムがおずおずと質問した。

「…もう歌以外のパートはありませんか？」

ジークはさすがにオータムが可哀想になつてきないので提案した。

「じゃあ…カスタネットを一人入れようか…！」

ジークのこの提案の意図を大多数の人が理解し、オータム以外の人は誰もいなかつた…と思つたら一人いた。

サシヤである。

「私、昔カスタネット奏者だつたんです。カスタネットには絶対の自信があります。」

ジークは半信半疑で質問した。

「カスタネットってそんなに違はあるのー？ちょっとやってみてよ。

「 サシャはカスタネットをもつと、カスタネットってそんな音がでる
んだーみたいな素晴らしい音を繰り広げた。

「…うまいね…じゃあサシャで決定で。」

第一回イベント会議はそつやつて幕を閉じた。
次回は2週間後に開く予定をした。

女性たちの休日（午前）

「ひまねえ……」

「暇だわ。」

「暇ですね」

助手のアリーとオータムとカリーは休日カワーテリアでくつろいでいた。

けどね

「いつも、忙しい時と暇な時の落差が激しいとねえ……」

「あー……なんか面白いことないのかなあ……」

「オーラムさん、最近マークさんと並びなんですか？」

「んー……何にもないわよ。」

「まだ、付き合つてゐるんですか？」

人間の死んだんなし

何がですか？

最近会ってないし
連絡も来ないし...」

— やすかに夢想尼かざれたんじゃなくてす?

「……そこがモーサリーハなんかなしの？」

：私は全然なってですよ――

「なんかあの人にいとがなーいの?」

「あーーガラ先生とか優しくて素敵だと思うんですけどね…」

「が、ガラ先生！？ 妻子持ちじゃないの！？ ダメダメ！！」

冗談ですよーー。アリーさんは?ロス先生とその後どうなんですか

か
?」

うーーーん 何かしら悪いのはぐれでるの悪が生じる

「けど？」

「なんか… オータムのこといつもチラチラ見てるんだよねー。」

「アリー、私本人の前で、それ言つ？」

「いいじゃん。今日は無礼講つて」とで、昔何かあったつていうん
だけど本当に何かあつたの？」

「…振つた…」

「やつぱりか…それでロス先生留学したの？」

「うん…でも、ロスがいなくなつてからは発狂しそうなくらい忙く
なつたから私めちゃめちゃ怒つちゃつて…」

「でも、フられた女と一緒に仕事はきついでしょ！？しかも、10
代で…」

「まあ…ね。」

「でも、ロス先生を振るなんてもつたいないよねー。かっこいいし、
優しいし。」

「人には好きなタイプつてもんがあるでしょ？が！」

「話変わりますけど、アリーさんもよく頑張れましたよねー！助手
や弟子の先生たちから総スカンくらつて…！」

「まあね…」

「アリー…一言相談してくれればよかつたのに。」

「あの時は…ね。オータムはなんかロス先生を嫌つてゐみたいだつ
たし、サリーは…ね。」

「なんですか！？」

「恋愛」とで相談してもね…」

「なんですか！それ！私だつて恋愛で悩んだりもしますよ！…失
礼な！」

「「…めん」「めん。」

女性たちはひつひつして休日の午前を過げた。

女性たちの休日（午後）

「ひまねえ……」
「暇だわ……」
「暇ですね……」
「あつ。あの人ちょっととかつこよくなないです？」
「そーねー。まあまあかな。」
「ちょっと、暗そうじやない？」
「オータムさん、理想高すぎですよ。」
「何よ！その嫌味は！！」
「じゃんけんで負けた人があの人に声をかけるってのははどうです？」
「えー やだあ。」
「別に私あの人興味ないもん。」
「問答無用！じゃあんけん……」
「ちょっと！」
「やだやだ！私出さないからね！……」
「ポン！……」
「……」
「……」
「はい。オータムさんの負け。」
「行かないって言つてるじゃないの！」
「じゃあ、なんで出すんですか？」
「ううう」
「オータム負けたんじゃしそうがないんじゃない？」
「アリー……勝つたからって……」
オータムは渋々座つて いる男に声をかけに行くことになった。
「あの……」
「はい？」
「今つて……何やつてるんですか？」

「ああ……ちょうど暇になつたんで本でも読んでたんですよ。」

「そーなんですか…」

「…」

「…」

「…」

「…失礼します…」

オータムは顔を真っ赤にしながら戻ってきた。

「全然会話弾まなかつた…」

「見てて分かりましたけどね。もつと自分から話題振らなきや…」

「何を話していいのやら…」

「分かりました!! 私が手本見せますから…」

「…やめとけば?」

「なんですか! アリーさん。私じゃ無理つて言つんですか!…?」

「別にルックスとかは問題ないんだけど、あなたつてナンパ下手すぎるじゃない?」

「し、失礼なこと言わないでください…! 行きますよ…!」

今度はサリーが座つている男の元へ行つた。

「ハーサイ。何してるんですか!…?」

「本を読んでたんですよ。」

「軟弱者!…」

「へ…」

「なーんちやつて…あはは。」

「…? ははは。」

「何の本読んでたんですか?」

「『風の星』つていうタイトルなんだけど…」

「あー! 私読みました。なんで主人公死んじゃうんですかねえ。まさか、マコが犯人だとは!」

「な、なんで小説の結末はなしちゃうんですか! まだ、読んでないのに!」

「あ、すいません。まーでも対して面白くなつたし、これ以上読

んでもねえ……

「もーいいです！さよなら！……」

男は立ち上がり去つていった。

サリーはすごすごと戻つて行つた。

「どうだつた？何か結構話してた気がするけど？」

「……ちよろいですね！……あの男はもう私の物ですよ！……」

「ホントに！なんかメチャメチャ怒つてたような気がするけど……」

「全部計算のうちです！ご心配なく。今度ここに来た時が私の実力を思い知ることになりますよ！……」

「ふーん」

その男は今後この喫茶店に現れるとはなかつた。

男たちの祝宴

「それじゃあ、カンパーア！」

「カンパーア！！」

ジーク、ロス、ザックス、ガラ、モズで居酒屋で飲むことになった。

1時間後…

「いやー！たまには男だけで飲むっていうのもいいもんだな！」

「診療所は女性の方がが多いからなかなかこういう機会もないですね。」

「あいつら絶対調子に乗ってるよ…アリーなんて…俺のロス先生となれなれしくしやがって！」

「ザックス…序盤から飛ばしそぎじゃない？」

2時間後…

「でも、診療所の助手つてきれいな人多いよね。」

「特にオータムさんは凄い美人ですよね！」

「モズ先生はオータムの昔を知らないから…」

「いや…昔も今も性格いいぞ…あいつは」

「ガラ先生がいなくなつてから本性を現し始めたんですよ。ロスがいなくなつてからはもう…何度も殺されかけたことが…」

「兄さん…迷惑かけたね。」

「いやいや、しょうがないよ…でも…今みんながいてくれて本当に幸せだよ…！」

「ジーク先生は今の仕事を何年間も一人でやつてた時期があるんですね？」

「モズ先生聞いてくれるか…俺の苦労を…」

3時間後…

「でね…ある時思い立つて弟子をとりいりしてね…」

「ジーク先生…その話5回目です…」

「あ、そうか。じゃあ別の話を…でね…ある時思い立つて弟子をとりいとしてね…」

…地獄だ

モズは素直にそう思つた。

ジークをモズに任せて、ロス、ザックス、ガラの3人は話していた。

「ロスは弟子と助手の中で誰が一番タイプなの？」

「うーーーん。アリーかな…」

「でたでたロスは。自分を想つてくれるからつて…」

「そんなんじやないですよ…やつぱり一番話しやすいです…」

「昔はオータム一筋だったのにな…結局フラれたのか…」

「…ほつといてください。オータムは昔から好きな人がいましたから。」

「まあ…おまえの立場を考えると、診療所にいたくなくなる気持ちもわからなくもないかな…」

「まだ、10代前半ですかね…諦めるつてことを知らなかつたんですよ。」

「…で、諦めはついたのか？」

「ええ、凄いいい男になつて、迎えに来るつもりでしたけど…」

「ロス先生はもの凄いいい男ですよー…」

「ザックス、ありがとう。もう飲むな。ガラ先生は誰がタイプなんですか？」

「俺は妻一筋だもん。」

「ニヤニヤ、じゃあ、ワンナイアゲあるな？」「

「うーん。サリーかなあ。」

「い、意外な人選ですね。」

「生活がカバカバ」であるから

性根がサハサハしてゐるから後腐れなさそうじ」ハシ

「結婚してゐる人の考え方で時々怖い…妙にリアリた
「ザックスは？」

「心」の意味

「あー、リースね。
でも噂話が凄いもんなあ。
一
お俺で立つか……！」
「立なんか可愛いんじ
ないかと……！」

「 並) 一) も 2 。 井 一 の 8 。

卷之三

こうして夜はふけていった。

心がおかしい？

ジークは最近調子がおかしいと感じていた。

たまに治療中、心がドキドキして間違つことによくあった。

ある診療中…

「ジーク先生…何ボーッとしてるんですか！？」

「お、おおそうだつたな…」

「ち、違いますよーー！その箇所はもう治したでしょーー。」

「す…すまん。」

オータムがジークを心配して言った。

「ジーク先生…どこか調子悪いんですか？今まで一回でもそんなことやらなかつたでしょ？」

「いや…大丈夫だよ…大丈夫…」

また、ある診療中…

「ガーゼとつて！」

「ちょっと待つて下さい…」

「いいよ。俺取るから。」

「いや、私取れますから。」

オータムとジークの手が重なるとジークは顔が真っ赤になった。

ジークは思わず手を払いのけた。

「す、すまん…！」

「…？はいガーゼ！」

ジークはガーゼをとり、噴き出た汗を思わず拭いてしまった。

「せ、先生ーーなんで自分の汗ふいてるんですか！…」

「おわあ…し、失礼しました！…か、代わりのガーゼとつて…！」

またまた、ある診療中…

「ジーク先生とオータム先生はいつみても息がぴったりだねえ。」
よく被災する患者がそう言つた。

オータムは笑顔で言つた。

「まあ、付き合いが長いですからね…お互の思つてることは大
体分かりますけどね。ね、ジーク先生…！」

「…」

ジークは顔を真っ赤にしながら後ろを向いていた。

「…？どうしたんですか？」

助手たちの休憩時間中…

オータムが心配そうに言つた。

「ジーク先生…スランプかしら…最近ミスが多いんだよね。」

アリーが言つた。

「そう？ジーク先生が診療中ミスなんか一回も見たことないけど。」

「私も」

「私もです。」

オータムが首を傾げていった。

「昔から一緒にやつてきただけど全然ミスしない人だったのに…なん
でかねえ…」

「オータムさんの時だけミスするつて変じやないですか？何か怒らせ
ることやつたんじやないですか？」

「えー！…特に思い当たらないけど…」

「ビビらせる」ととか…怖がらせる」ととか…」

「あたしゃ怪獣か……ないけどなあ。」

恋…しちゃってる？

ジークと助手のアリーの診療中、ジークがアリーに言った。
「あのさ、ちょっと後で相談があるんだけど…仕事終わったら話してもいい？」

「はい。大丈夫ですけど…」

仕事終わりに…

ジークがアリーに話しかけた。

「最近、オータムってさ何か変わった？」

「いや…全然そんなことないんですけど…」

「そう…」

「どうしてですか？」

「いや…最近オータムをまともに見れないっていうか…」

「それって…ジーク先生が変わったんじゃないですか？」

「…どういう風に？」

「それって絶対こ」

「わーーー言わないでくれ…！」

「な、何でですか！？」

「薄々俺もそうじゃないかとは思ってるけど、そんなんじゃ仕事にならないじゃん…！」

「まあ…そうですよね。」

「アリーはどうやってロスと仕事してるの？」

「私たちは大人ですから。そういうコントロールはわきまえているつもりです。」

「俺らだって十分大人だよ…！」

「オータムとジーク先生は子供です。少なくとも恋愛では14歳レベルです。」

לען... לען

「一人とも仕事ばかりでまともな恋愛なんて一つもしてなかつたんでしょー?」

「失礼な… ラーマさんと…」

「食事行つただけでしょうが！！あんなもんぢやないんですー恋愛

ג' ט' ט' ט' ט'

「さうと、すこと忙しかったもんだから、急に時間ができる。自分
の隣を見てみたんでしょ。そしたら凄く美人で、ジーク先生にずつ
と付いてきていて、恋人もいない人がいる。恋にも落ちますよ。」

「いいましたともーー！ オータムがかわいそうですよーーすっ」と森象外で見ていたの「おー」と呼んでいた。「おー」と呼んでいた。

「敵の手に取られぬよう、おまかせだよ、アーヴィング！」

「そんな」と自分で考えなさい……いいですか……あなたの気持ちにもつと素直に向き合ってみたりひとつなんですか？仕事のこととか考えないで……」

- 1 -

「オータムはずつとあなたの事を考えています。それは…仕事上だけかもしないんですけど…あなたのことをずーーーっと…」

- 1 -

「ジーク先生… あなたもオータムの」とをもつともつと考へなさい。
それでもオータムがジーク先生を想つてゐる1%にも満たないんで
すから…」

- 1 -

ダンスパーティー

イタリー王国でダンスパーティーの知らせが来た。
診療所にも招待状が届いた。

男性陣は全員招待状を受け取った。

基本的には男女の2人で一組なので男性は女性を誘わないと行くことができないし、

女性は誘われないと行くことはできない。

今回は既婚者以外の男性は診療所の女性を連れていくことにした。
(できるだけ多く参加するために)

ロスの場合…

ロスはアリーに話しかけた。

「あ、あのさ…今度ダンスパーティーがあるんだけど…」

「は、はい。」

「一緒に…行かない。」

「は、はい。喜んで！」

ザックスの場合…

ザックスは皆に聞こえるように言つた。

「誰も誘う人がいないから、しょうがないからリースでも誘おうかな…！」

リースもまた大声で言つた。

「ダンスパーティーに行きたいからじょうがないからこの誘い受け
るとするかあ…！」

バラの場合…

「俺はダンスパーティーなんてガラジやねーよー！」
そう言つてお酒を飲みながらみんなの前で招待状を破つた。

モズの場合…

サシヤがモズの前に立つて言つた。

「私…ダンスパーティーって言つたことないんですね…もし、誰も誘つてくれなかつたら…私ショックで自殺するかも…」
モズは慌てて言つた。

「さ、サシヤ一緒にダンスパーティー行こうよーー！だから死ぬなんて言わないでね。」

ジークの場合…

オータムがジークに言つた。

「ジーク先生は誰を誘うんですか？」

「お、俺！？…うん。」

「…どうしたんですか？」

「オータムはダンスパーティーって行きたい？」

「私は…いまいちだなあ…ダンスも踊つたことないし…別に負け惜しみとかじゃないですよーー！」

「うん…知つてる。」

「…本当にどうしたんですか？最近どこか変ですよーー。
結局、オータムを誘えなかつた。

ダンスパーティー（2）

ダンスパーティー 前日…

アリーはジークに話しかけた。

「結局、オータムは誘つたんですか？」

「…いや、誘えなかつた。」

「何やつてるんですか！！」

「だ、だつて…」

「だつてじゃないでしょーすぐ」誘つてきなさい…」

「は、はい。」

ジークはオータムの元へ行つた。

「ジーク先生？どうしたんですか？」

「うん。…………あのや…」

「何ですか？」

「…いや、何でもない。」

「先生、本当に大丈夫ですか？」

結局この時も誘うことができなかつた。

アリーに会うと怒られるので、極力会うのは避けた。でも、すぐに見つかってしまった。

アリーはジークがまだ誘つてないのがわかると激怒した。

「何で…何で一言が言えないのよ…」の意氣地なし…あんたなんか恋愛する資格ないわよ…！」

「…」

ジークはシュンとした。

アリーは怒りをなんとか抑えながら言つた。

「ジーク先生、言わないと…」の先ずつと気持ち隠していくつもりですか？」

「…アリーに言われた通り、ずっとオータムのこと考えてみたよ。俺、俺あいつのことが好きだよ。でも、俺…あいつがい人生なんて考えられないんだ。だから…急に言いつの怖くなつて…だつてずっと一緒に過ごしてきて…」

「先生…フラれたつていいじゃないですか。それは新しい始まりつてことですよ。このままじゃジーク先生も…オータムも前に進めない。」

「…」

結局、この日もジークはオータムを誘わなかつた。

バカみたい

ダンスパーティー当日…

城では各国のセレブがぞくぞくと呼ばれていた。

みんなタキシードやドレスを新調したが、着慣れていないので若干浮いていた。

ダンスが始まり、みんなが踊り始めた。

診療所にて…

「そろそろダンスパーティーの時間ですね…」

オータムが呟いた。

ジークはオータムの呟きを無視して一心不乱に治療していた。

「ジーク先生…今日は気合に入りますね。」

オータムはびっくりして言った。

いつものペースの倍近くで飛ばしていた。

夕方…

治療を全員終え、ジークは弟子に指示して後は任せた。

ジークは一回深呼吸して言った。

「オータム…一生のお願いがあるんだけど…」

「一生のお願いって…いきなりなんですか？」

「ある女の子と一緒にドレスを買いにいって欲しいんだけど…」

「なんだ…そんなことですか…いいですよ。どこにいるんです?」

「街のパリスホテルの前で待ってるから、よろしく…」

「お金はもちろんジーク先生持ちですよね?」

パリスホテルにて…

オータムはパリスホテルの前まで行くと、一人の女性が待っていた。その女性はオータムを見ると、近づいてきた。

「オータムさん？」

「はい。もしかしてジーク先生の？」

「はい。じゃあ、行きましょうか…」

二人はホテル内にある高級ブティック店に入り服を探し始めた。

「オータムさんは自分の欲しい服はありますか？」

「私だつたら断然これを選びますね。めちゃめちゃ高いんですけど、お金ジーク先生出すんだから。」

そういうて、冗談交じりに笑った。

「分かりました。でも、私はこれにします。」

「いいんじやないですか？」

「オータムさんはこれを見つて下さい。ジーク先生には私から言っておきますから。」

「えつ…いいんですか？やつたあ…じゃあ、遠慮なく…」

「試着してもいいですか？」

「分かりました。私も試着しよーっと。」

二人は試着した。

「ぴつたりだ！」

オータムがそう言って喜んでいると、その女性は言った。

「ちょっと、こっちに来てくれませんか？」

そう言って、オータムの手を引いた。

オータムは訳が分からぬままついて行つた。

そして、ある一室に入るとジークがタキシードを着て待つていた。

室内はまるでダンスパーティー会場のような部屋で静かな音楽が流れていた。

ジークはオータムの前まで行って、手を差し伸べて言った。

「僕と…僕と踊つていただけませんか？」

オータムはあまりの展開に驚きついていてなかつたが、やつと事態を把握すると、ジークに笑いかけて言った。

「ジーク先生…バカみたいですよ？」

そう言いながら顔を赤くして、ジークの手を取つた。

二人のダンスパーティーが始まった。

オータムはジークに言つた。

「私…今日のこと、一生忘れません…」

ジョギング

ロスとアリーのデート中にジョギングの話で盛り上がった。そして、今度一緒にジョギングをする約束をした。

ジョギング当日…

「ロス先生！」

「お待たせ。じゃあ、行こうか」

「はい。」

二人は走り始めた。

趣味のジョギングを一人並んで走れるなんて幸せこんなことを想いながら、アリーはロスの方をちらりと見た。すると、ロスは猛ダッシュで何かに追われるかのように走っていた。そして、見えなくなってしまった。

アリーはしばらく走っているとロスが汗だくで座っていた。そして、アリーを見ると立ち上がり走る準備をした。

「あのロス先生…」

アリーは声をかけようとしたが、

ロスはそんなことはお構いなし、また猛ダッシュで走り去つて行つた。

：ジョギングってこんなのだつたつけ

アリーは思った。

1時間後…

この繰り返しがかれこれ4回続いた後、アリーはジョギングを休憩しようとロスに声を掛けようとした。ロスに声を掛けようとするが、ロスはアリーが近づくと走り去つてしまふ。

なんだか、もうどうでもよくなつたのでアリーはジョギングをやめ

て帰つた。

4時間後

「アリー遅いな

ロスはまだアリーを待っていた。

嵐を呼ぶ女

診療所に一人の女の人が来た。

その女性は受付まで行くと言つた。

「すいません。ザックスはいますか？」

「ザックス先生ですか？ちょっと待つて下さい。」

10分後、ザックスが来て、その女性を見るととても驚いた。
その女性はザックスを見ると、ザックスめがけて走り熱いハグをした。

ザックスは慌てて言つた。

「お、おい！イリア…どうしてここに…？」

「どうして…全然帰つてこないから…私が迎えに来たんじゃない！」

たまたま、その受付はリースだった。

リースは笑いながら言つた。

「ザックス先生…こんなに人前で熱いハグをしあうのはよくないんじやありませんか？」

「い、いや違うんだ……これは…」

「は・や・く離れたらいかがです？」

ザックスはイリアを無理やり引きはがして、リースに聞こえるように言つた。

「君とは俺が国を出る前に終わつただろう！？」

「あんな別れ方つてないわよ……私は了承したつもりはありません！」

「そんな…」

「と・に・か・く私はあなたが国へ戻らない限りずっとここにいるつもりですかから…！」

ロスが騒ぎを駆けつけて来た。

「イリア……どうしたんだ……」こんなところで……」

「ロス先生……お久しぶりです。突然ですが、私を雇つて下さい！」

「

「いや、まあ君ほどの魔術医師なら大歓迎だけど……」

ザックスが横やりを入れた。

「ロス先生……そんなこととんでもない……イリアは私を国に連れて帰りたいだけなんです。」

「いや……でも、うちは来る者拒まずやつてるから。多分兄さんも賛成すると思うし……」

「そんな……」

ザックスはリースの顔をちらりと見た。

リースはただただ笑顔だった。

殺されるかもしれない

ザックスは本能的にそう感じ取った。

1時間後……

ザックスが凹みながら治療していると、ジークが来た。

「ザックス先生……話聞いたよ……落ち込んでるんだって？」

「いや……今回ばかりは……」

「君を和ますために一つジョークを作ったんだけど……」

ザックスはため息をついた。

嵐を呼ぶ女（2）

イリアの治療を見ると、即採用された。みんなザックスの事情は気になるところだが、休みがやはり欲しかった。

ジークがザックスに言った。

「ザックス！ この人凄いじゃないか！」「はい…私と同じく副所長をやつっていたので。」「お前には悪いけど、採用させてもらうよ。とにかく、イリアを採用したからつて出ていいかないよね？」「私はロス先生がどどまる限りずっとここにいるつもりですよ。」「よかったです。じゃあよろしく頼むね。」

イリアが雇われて1週間が経った。

イリアはところ構わずザックスにアプローチした。リースはその光景を見るたびにイライラが募った。あるイリアとリースの診療中、リースがイリアに話しかけた。「イリアさんはザックス先生のどこが好きなんですか？」「どこが好きって言われてもね…うーん…頑固なところかな…」「まあ…確かに頑固ですね…」「よく二人で喧嘩しててね…私も頑固だから。でも、やつぱり正面切つてぶつかりあえる相手だつたからね。」「…そうだったんですねか。」「あら、仕事中断しちゃったわね…まあ治療始めましょうか。次の人に呼んできて…」

ザックスが仕事が終わり家へ帰るとリースが待ち構えていた。ザックスはリースを見るなり言った。

「ち、違うんだよ…本当に前の国では別れたんだよ…だから君

と付き合つたんだよ！！

「どうせ一方的に別れ切り出しちゃ、わざわざ旅に出でやつたんじよ？」

「うつ…」

「そんなの相手からしたら別れたとは言わないですよ。理由も言わずに去るなんて…そもそもあんなに素敵な人を本当に好きじゃなくなつたんですか？」

「…」

「もう…いいです。」

リースは出でていった。

レッツ――ハロウイン

「とうとう来たな……」

「長かつたですね……」

「今日は盛り上がるぜ……」

イエエエエ――

診療所の年間行事ハロウインパーティーが始まった。保母さんの制服を着たアリーが、ジークに指摘した。

「ジーク先生……今年は動物シリーズは止めたんですか？」

「ああ、昔は忙しすぎてストレス貯まりすぎてたからな。正直はしやぎ過ぎてたよ。今日はバンパイアってどこかな……」

「いつになく逃げてますね……今年はオータムの目が気になるからじゃないですか？」

「ば、馬鹿なこというなよ……ちなみにオータムはどんな格好なの？」

「まだ、知らないんですけど……」

その頃、ザックスはイリアと話していた。

「……可愛いじゃん。それって、東の民族衣装だよね？」

「あら、ありがとう。『キモノ』っていうんだって。」

2人で話しているとリースがどでかい斧を持って現れた。

「……その斧って本物？」

ザックスが震えた声で聞いたが、リースは笑顔で答えた。

「はい。連續殺人鬼『ジャイナソン』が持っていたとされる斧で浮気した女性をこれで殺しまくっちゃうそうですよ。」

「イ、イリア……じゃあ俺あっち行くから……」

ザックスはそそくさと逃げて行った。

一方、モズはサシャと話していた。

「サシャは黒魔術師が怖いくらい似合つね…」

「フフフ… ありがとうございます。あなたもピエロの格好似合いますよ。」

「ピエロ知ってるの？」この国ではサークัสやってないから知らないかと思つたけど…」

「…ちなみに何ピエロなんですか？」

「…何ピエロ？」

「ピエロでも色々あるでしょ？どのサークัส団のピエロなんですか？」

「いや、特に考へては…」

「どうりで。私がわからないピエロなんてあるはずないもんね。ツ

フフフフ

「いや… その…」

モズは返答に苦しんだ。

オータムが少し遅れて入ってきた。

サリーがそれを見つけると、オータムの元へ駆けつけた。

「めちゃくちゃ気合い入ってるじゃないですか…！」

「そ、そう？ へ、変かな？」

「いや、前の年はジーク先生と『シマウマ』と『豚』で笑い取つてた人とは思えないですよ。」

「あ、あのときは忙しすぎてハイになつてただけよ…！…ジーク先生は？」

「あの人も普通にバンパイアですよ。あーあ、今年はつまーんないなあ。」

ジークがさりげなくオータムの方へ行き話しかけた。

「よ、よう。」

「ビ、ビーキー も。」

「…似合ひのじやん。」

「ジーク先生も。」

「…」

「…」

「あ…今度お前が見たいって言つてた劇団が来るんだってさー俺暇

だから一緒にどお?」

「い、いいですね!私もちょうど暇だし…」

「…」の後のダンス誰か決まつてる人いる?」

「いえ…ジーク先生は?」

「いやーちょうどいなくつてさ。ちゅうどいにから踊るつか?」

「そ、そーですね」

未だにぎこちな過ぎるジークとオータムだった…

ある夜、オータムが帳簿を見ながら、悩んでいた。

「うーーーん。おかしいなあ…」

ロスがそれを見つけて話しかけた。

「どうしたの？」

「いや…どうも最近赤字続きで…」

「ここの診療所は助手も弟子も魔術医師も増えたもんな…給料も破格だし。」

「まあ…ここの魔術医師は世界トップクラスですから。人材が逃げないためにも給料の設定には目をつぶるとして患者の数が最近減つてるみたいなんですよ…」

「いや…前より増えてるくらいだけど。」

「でも…ほら…患者の収入が明らかに減つてる。」

「…それ…診察料自体減らしてるからじゃない?」

「いや、それはないですよ。私が経理の責任者なんですから…」

「…」

「はい?」

「ごめん…俺が診察料大幅に減らしちゃった…」

「えーーーーー!な、なんで勝手にそんなことするんですか?」

「いや、勝手じゃないんだけど…兄さんと相談してね!その…兄さんは反対したんだけどちょっとこここの診察料が高かつたもんと口論になつて…結局兄さんが折れてくれて…」

「ここの診療所は土地も都内の一等地で馬鹿でかいし、病院も最高の設備で作られてるんですよ…!税金だってめちゃめちゃ高いし…あれくらいの診察料が貰えないと、いつか破産しちゃいますよ…!」

「えつ…!…だつて、前見た時は小国の国家予算くらいあつたのに…」

「病院を改築して以来大赤字がずっと続いてるんですよ…!…それでも、弟子や助手を育てるためだと思って…いつかは育つて黒字にな

ると思つてたのに…」の料金設定じゃ本氣でヤバイですよ…」

「ビ、ビツすれば…?」

「つむは慈善事業でやつてるんじゃないんですから…すぐ料金を高くします…！」

「や、そんなあ…あんな料金じゃ誰も来られなくなつちゃつよ…」

「お金を持つてない人は分割払いでもいいから払つてもらいます。

…道理で最近分割で払いに来る人が少ない」と思いましたよ…」

「…はい。わかりました。」

ロスがトボトボ歩いていると、ジークが話しかけた。

「どうした? 何落ち込んでるんだ?」

「いや、それがさ…」

「こんな時にお前が元気になるジヨークが一つあるんだけど…」

「…はあ…」

ロスは大きくため息をついた。

部屋を探そう！

ジークは街の人気雑誌を読んで、何やら考えていた。

「そこへ、ロスが来て話しかけた。

「兄さん何見てるんだい？」

「いや…俺達って2人で1つの部屋に住んでるじゃん？」

「そうだね。」

「そろそろ診療所の部屋から移ろうかと思つてさ…」

「なんで？どうせほとんど違う時間帯だし一人の部屋のようなものじゃない？」

「えつ、いや…イリアも入つたことだし、メンバーも充実してきて、休みも取れるようになつたから、これからロスにも一人の時間が欲しいんじゃないかって思つてな…」

「いや、別にそんなことはないけど…」

「と、とにかく暇なら部屋探し手伝ってくれよ…！」

「いいけど…」

二人は手分けして部屋を探すことにした。

「兄さんこれなんかどう？」

「…それはちょっと狭いんじゃないかな？」

「一人だと十分なくらい広いと思うけどなあ…」

「予算は腐るほどあるんだからいいでしようが…！」

「ふーん。じゃあ、もうちょっと広い部屋探すか…」

「ロス、これなんかは？」

「…うーん。いい部屋だとは思つけど、これ二人部屋だと思つよ。つてか書いてあるし…」

「…これにしようかな…ちょっと見に行かない？」

「いいけど…一人で住むの？」

「そんなわけないだろ…！」

「ふーん」

一人はお目当ての部屋についた。

部屋の案内人が部屋の説明を丁寧にしてくれた。

シーケが呑した

「ふーん。いい部屋だな。一目見た時からきついってたんだよなあ。」これにしようかなあ……

「ここ。」アリサは自慢の部屋です。見晴らしも最高です。

「ハジマーハジマス」

「そ、それは失礼いたしました。

案内人は深々と頭を下げた。

ジークはキャッシュで前払いですべてを払つた。

帰り際案内人がジークに囁いた。

失礼ですが、一人で住むといふ話は本當ですか？」

「私、不思議な一人の女性が、お隣様を説き立てた

私は、不肖ながら一人で住むお客様は間違えたことにございません。今後のお客様の対応にも関わってきますので一つ教えてはもらえない

いでしょ^うか?

案内人は呟いた。

絶対一人で住むな…もしくは住みたいと願っているか…

試験

弟子たちも今かなりの実力を持っている。
そこで、魔術医師の試験を行い受かつたものには魔術医師の資格を
あげることにした。

第1次試験 知識問題

サシャンが開始早々寝だした。

試験官のジークはびっくりしてサシャンを起こさうとした。
しかし、どんなに頑張って起こそうとしても全然起きないのでやる
気がないんだろうと諦めた。

しかし、試験終了30分前にバッと起きて鬼のように問題を解き始めた。

試験終了後、サシャンの答案をみるとすべてが埋まっていた。
サシャンはジークに謝った。

「わしゃ歳とつとるでな…30分ぐらいしか集中力が持たないんじ
やよ。寝てすまんかったの。」

「そつだつたんですか…そつこうじとやしたら全然構わないんですね
よ…」

しかし、ジークにはもう一つ気がかりなことがあった。
チラッとしか見てないが、サシャンの答案の正答率が異様に低い
感じがした。

ジークはそのことについては忘れる決めた。

第2次試験 実践治療

実践の治療はみんな中々なものでほとんどの弟子が重症患者を何人
も治せるまでに成長していた。

なかでも、飛びぬけて成長していたのはマザコンのチャだった。
母親離れたチャは30人もの重症患者を治してなお余力があるようを感じた。

ロスが、びっくりしてチャを褒めた。

「凄いじゃないか！君が一番多く重症患者を治すことができたよ！」

「…はい。」

「筆記試験も問題ないし！…こりゃ魔術医師試験合格第一号はチャかもな…！」

「…ありがとうございます。」

「…暗いな…もつちょっと嬉しそうにしてくれても…」

「…嬉しいです。」

「そ、そう…」

今回はチャを含む3人が魔術医師としての認定証を勝ち取った。

この大陸には2つの大きな診療所があった。

1つはジーク達が運営する診療所、もう1つはより北にあるライラ診療所だった。

ライラ診療所はジークの診療所よりも人の数も、医療設備も格段によかつたがジークの医療魔術の人材はトップクラスなので2つの診療所は同等の評価を受けていた。

今回、ライラ診療所から技術交流の打診があった。

ジークはそのことについてオータムと相談した。

「ライラ診療所から技術交流の打診が入ったんだけどオータムはどう思う？」

「今更何なんですか！！何度も私はライラ診療所に人がいないから助けてくれつてお願いしていたんですよ。それなのに返事の一回もよこせなかつたくせに…技術交流！？ふざけんじやないわよ…！」

「オ、オータムさん…落ち着いて…」

「もちろんジーク先生は断りましたよね！？」

「い、いや…」

「こ・と・わ・り・ましたよね！？」

「そ、そうだね…断るうと思うよ…」

「ならないんですけど…！」

ジークは去り際、思い切って言った。

「『めん…！もうオッケーって返事だしちゃった…！』

ジークはそういうや否や逃げた。

オータムはそれを聞くともうダッシュでジークを追いかけた。

その後、ジークがどうなったかは…

結局、ライラ診療所に格の違いを見せつけるところことで精銳のメンバーが選ばれた。

魔術医師はジーク、ザックス、ガラ

助手はオータム、アリー、リース

弟子は最近魔術医師になったチャ

このメンバーで行くことになった。

メンバーはライラ診療所にむけて出発した。

テイテ診療所までの道のりは5kmかかる。

水の間
一
久美子馬鹿
時
力
力
て
る

黒車内にて

ジークは診療所を出て旅をするのが16歳の時以来だったのでもう

「ここでゲーム大会をやりまーす！！

「ゲームなんて持ってきてませんよ?」

「さあ、それからこのハーフは打ってきてるんかな……」

「いや……だつて手紙には医療器具は持つてこなくてもいいって書い

てあーたじゃん!!

『そんなの私たちをバカにする眼に決まってるじゃないですか!!!』

ね！ がはは『 つて！！

そんなアホな…まあ置してきちゃうたものにしょいかなしから

「知つません!!」弘は絶叫

オータムはすねて端の方でいじけてしまつたが、

みんなに黒車内が暗なのでシーケの提案に乗った

1 時間後

「あーーーー！アリーが一番高い家買いやがったーーーー！」
「フフフフ…私たちの家族は貴族ですからね…」

「ガラ先生…また借金ですか…」

「つうむ…」うなつたら誰か子供を売らなければいけないのか…」

「まあ…ゲームですからね…」

「すまん…」ゲームとは言えども、子供を売るわけにはいかん…！

！だつて…だつて自分の子供の名前つけたりやつたんだもん…」

「ガラ先生…じゃあ俺がどっちか選んで貰つていきますよ…」びつ

ちがいいかなあ…」

「頼む…」子供だけは…子供だけは勘弁してくれ…」

「問答無用…」うつちの子を貰つていきますよ…」

「シリ…」

結構みんな白熱して盛り上がっていた。

技術交流（3）

馬車をずっと走らせて、やっと宿に着いた。

宿の外装は中々シャレっていて、みんな中はびいだりと胸を膨らませた。

みんなが中に入ると、中のボロさにみんな驚いた。

一人の老人が受付から出てきて言った。

「よ、ようこそ……いらっしゃいました。」

「は、はい。よろしくお願ひします。」

男女すべてが一緒に部屋だった。

男性陣はまんざらでもなさそうだったが、女性陣は露骨に嫌そうな感じを見せた。

温泉にて…

「一つ壁の向こう側には女性陣が温泉に入ってるんですね…」

ボソッとザックスは言った。

「シーツ……そんなこともし聞こえよつものなら、あこづらまた調子に乗つて嫌な態度とるぞ……君の気持ちは十分にわかる……ただ、声には出すな…」

「え、たすがガラ先生だ…」

部屋にて…

やはり旅行初日といつともあつてみんなテンションが上がつていた。

眠れないので、みんなで雑談することにした。

「そういえば最近ジーク先生引っ越したんですけど？」

アリーがジークに尋ねた。

「…誰に聞いたの？」

「ロス先生から。」

「…おしゃべりロスめ！…」

「なんで2人部屋を借りたんですか？」

「い、いや別に理由はないけど…」

「ジーク、別に将来を考えることは悪い」とじやないぞ。先のこと
を考えて広い部屋にしたんだろう？」

「ま…まあ」

「じゃあ、教えてもらおうか。誰との将来を考えたのかを…」

「ガラ先生…誘導上手い…」

ジークが返答に困りチラッとオーダムを見ると真っ赤な顔をしてう
つむいていた。

アリーは苛めるのはこの辺でいいかと思い、次はザックスに聞いた。

「ザックス先生は将来はどうするつもりですか？」

「えつ？」

アリーの攻撃は夜遅くまで続けられた。

技術交流（4）

長い道のりを経て、やっとライラ診療所へ到着した。

所長のライラがジークに挨拶してきた。

「本日はこんなところまで足を運んでくださつてありがとうございます。」

「いえ、こちらこそお招きいただいてありがとうございます。」

「伝説のジーク先生方の治療が見れるとあってみんな非常に張り切っています。どうぞ、お手柔らかに。」

「いえいえ、そんな…」

オータムがライラして耳元でささやいた。

「ジーク先生…！何デレデレしてるんですか…？」

「あ、挨拶してただけだろ…！」

メンバーは中に案内された。

診療所の中は、さすがに国内最高と評されるだけの素晴らしい設備だった。

医者の数も240人とジーク達の30倍いた。

ライラは説明した。

「今は魔術医師不足ですが、これから魔術医師をどんどん増やしていくつもりです。学校を1校建設して、弟子をそこで1000人教えていきますの…」

「ほえ――！――！凄いですね――。」

オータムがまたジークに囁いた。

「ジーク先生…！何間の抜けた顔してるんですか…？」

「でも、実際す”いじやん。」

「…ばか…」

ライラは一人の魔術医の前で立ち止まつて言った。

「この方はラシック先生といつて、非常に優秀な魔術医です。デモンストレーションとして治療してもらいましょう…」

ラシックは軽症の火傷の患者に呪文を唱えた。

すると、火傷の後は完全に消えて回復した。

ジーク達魔術医師らは拍手した。

ラシックが挑戦するまなざしで言った。

「伝説のジーク先生の治療を是非勉強させて頂きたいのですが…」

ライラも便乗して言った。

「そうですね。是非…！」

ジークは照れながらも受けた。

「ラシック先生の治療は丁寧で非常によかつたよ。ただ、少し時間がかかり過ぎかもなあ…」

ライラとラシックはその発言に非常に驚いた。

ラシックは治療のスピードが自慢の魔術医師で『サラブレッドラシック』と異名を取っていたからだ。（顔が若干馬面なのもあつたが）今のお治療も5分と掛からなかつた。

ライラは同じような症状の患者を一人連れてきた。

ジークはその火傷を見るや否や、呪文を囁きながら指でなぞつた。完全に傷を治すのに5秒と掛からなかつた。

ライラとラシックは愕然としながらジークを見た。

ジークは照れながら言った。

「まあ…時間が短ければいいってものでもないが、大きな合戦なんかがあると、スピード勝負になつてくるからね。ラシック先生もスピードさえ速くなれば優秀な魔術医師になれるよ。」

「あ、ありがとうございます。」

ラシックはそう言いつながらも非常にショックを受けていた。

技術交流（5）

ライラ診療所にジーク達が来て2日が経つた。

ライラもライラ診療所の魔術医師もジークのみ特別な魔術医師で、他のメンバーは並のレベルだろうと思っていた。

なので、ジークの元にライラ診療所トップレベルの魔術医師を派遣し、見学させた。

そして、優秀な魔術医師には他のメンバーを組ませて治療に当たらせた。

ライラはなんで助手までついてくるのかと不思議に思つたが、何もやらせないわけにはいかなかつたので並の魔術医師と組ませた。

ライラはジークの治療を改めてみたがやはり凄かつた。

重症患者はライラ診療所トップレベルの魔術医師でも1時間はかかるのに、

ジークはそれを2分かからずに治してしまつ。

それを1日で何千回と詠唱できるというのだから、正に伝説の魔術医師と呼ぶしかなかつた。

ライラはショックを受けて途方に暮れていたが、

他のところに回らないわけにはいかなかつたので他の場所の様子も見に行つた。

「えーーと、ザックス先生が治療している場所は…ここか。」

ライラはザックスが治療している部屋に入った。

ライラはそこで度胆を抜かれた。

ジークとほぼ変わらないレベルでザックスが治療している…

ライラ診療所の魔術医師は愕然とした表情でそれを見ていた。

ライラはザックスに思わず尋ねた。

「ザックス先生…あなた一体…」

「実は医療先進国最高研究所副所長だったんですよー。」

ザックスはこの手の質問には慣れているのでサラッと答えた。

「えっあの高名なーー！」

ライラもそばにいた魔術医師もただただ驚嘆するしかなかった。

ライラはジークを見た時以上にショックを受けたが、もうこれ以上逸材はいないうと願いながらガラを探した。そして、脆くもライラの願望が崩れ去った。

ガラもまた、ザックス、ジークと同様のレベルで治療を行っていた。

ライラはショックでフラフラした。

こうも違うものかと…なんで北と南なだけなのに、こんなに医療魔術のレベルがかけ離れているのかと…しかし、もう一つ嫌な予感がした…というより疑問が湧いた。あの助手たちも凄いのだろうか…と

ライラはフラフラしながら助手の仕事を見に行くと、魔術医師たちは助手のおかげで普段の10倍の速さの回転率で患者の治療ができていた。

軽傷であれば、助手たちが治してしまい、そこでお金をもらひ素早く帰らしていた。

もともと並の魔術医師たちには重症患者を任せていないので、ほとんど全ての患者が助手の治療だけで終わっていた。

しかし、助手は並の魔術医師を遊ばせるわけにはいかないので、適度に軽症患者を回していた。

ライラは自分の診療所のレベルが全然低いことにショックを受けて、凄く恥ずかしく感じた。

技術交流（6）

ジーク達が来て一週間が経つた。

ジーク達の余りの凄さにライラは自信喪失してしまった。

ライラは途方に暮れて診療所の屋上で空を見ていた。

オータムがライラの様子がおかしいことに気づき、屋上に行きライラの場所へ行つた。

オータムがライラに話しかけた。

「どーしたんですか？…元気ないですけど…」

「今まで私がやつて来た事つて…なんだつたんでしょうね…」

「何がですか？」

「私の診療所の人たちは、あなたたちの凄さに圧倒されていますよ。こここのレベルがどれだけ低いのかを感じ取つては必ずです。私だけ一緒です。」

「なんだ…そんなことですか…」

「そんなことつてどういうことですか！？」

「そんなことじやないですか！！私たちがどれだけ頑張つてきたのかも知らないで…」

「…どういうことですか？」

「私たちは魔術医師がジーク先生が1人になつてしまつて、助手の3人でそれを支えてきたんですよ！！何回もライラ診療所に助けの手紙を出しましたよ！！でも、あなた方は一回として助けてくれなかつたじやないですか！！その時、ジーク先生がどういう生活してたと思います！！一日睡眠が2時間眠れればいい…そんな時が何年も続いて…そんな地獄に比べたらあなたが思つていることなんて取るに足りないとでしょう…！」

「…」

「やつと助けてくれるメンバーが集まつて、弟子だつて育ち始めてる…でもそれはジーク先生が挫けずに頑張つてきた結果なんです！」

！あなたたちもジーク先生の1%でいいからもつともつと頑張りなさいよ！」

オータムの怒鳴り声を聞いてジークが上がりってきた。

オータムはジークを見つけると怒りながら去つて行つた。

ジークはライラの元に言つて謝つた。

「うちのオータムがどうもすいません。」

「いえ…あの時はすいませんでした。」

「あの時？」

「私…実はオータムさんから手紙貰つてたんですよ。何人か…応援を派遣してほしいですって…私その時派遣しなかつたんです。私たちのところだつて余裕ないからつて…でも非常に苦労されたつて話で聞きました。」

「ああ…しようがないですよ…オータムたちはあの時そーやつて頑張つてくれてたんですね…ところでどうですかうちのメンバーは？」

「本当に素晴らしいです…私のやつて来たことがまるでダメだつて思つぐらいに…」

「…でも、私はあなたのことを尊敬していきますけどね…」

「えつ？」

「…うちのメンバーはほとんどが才能に溢れています。でも、あなたは並の魔術医師だつたでしょ？それでここまで立派な診療所にしたなんて信じられません。」

「…ありがとうございます。」

技術交流（7）

ジーク達がライラ診療所に行つてゐる間、ライラ診療所からも魔術医師が来ていた。

ロスが代表で出迎えた。

8人くらいの魔術医師が來た。

ロスが代表者に挨拶した。

「どうも、ロスと言います。よろしくお願ひします。至らないところがあつたらなんでも行つて下さい。」

「こちらこそ…代表者のノックスと言います。今日からお世話になります。」

非常に丁寧にあいさつしてくれたが、まなざしは俺の方が優秀だと言わんばかりだつた。

ロスは早速ノックスたちを診療所の中に案内した。

ノックスたちは診療所が患者であふれている様子を見て、だらしない診療所だと思つたらしかつた。

ノックスがロスに言つた。

「失礼ですが、もう少し診療所内をしつかりした方がいいのでは？一人一人が効率よく動かないといい仕事はできませんよ。」

「…そうですね…確かに…しかし、一人一人の負担が大きくてどうしても行き届かなくなつてしまいまして…」

ノックスは得意げに言つた。

「…そうやつて自分たちの実力のなさを環境のせいにしてるからダメなんだと思いますよ！！！」

ロスはシウンとして言つた。

「…そうですね…気を付けます。」

ノックスは自分の実力に絶対の自信を持っていた。

ライラ診療所でトップクラスの実力で次期所長と噂されていた。

ただ、この診療所の評判が凄くいいのでノックスはいつも腹立たし

く感じていた。

なんでこんな患者があふれている診療所の評判がいいんだろう

そう思い、ノックスは自分の実力を見せてやるつもりだった。
ノックスはロスに言つた。

「早速、治療を見せて頂きたいのですが！！」

「そうですね……じゃあ、モズ先生の治療を見てもらいましょう。」

ロスはノックスたちをモズの元へ連れて行つた。

モズはいつものメンバーが不在な分疲れていたが、通常通り治療を行つていた。

モズの通常の治療はノックスたちに自信を失わせるには十分な手際だつた。

ノックスはたまらず尋ねた。

「……あなたはこの診療所で一番の実力なのですか？」

「いやいや、私はこの診療所の魔術医師では一番ダメですよ……」

「……」

「今日はノックスさんたちの治療を見て勉強させてもらいます。じゃあ、次の患者から交代しますのでよろしくお願いします。」
ノックスの顔は真っ赤になつた。

絵本の館

ライラ診療所でお世話になつて1週間が経つた。

ジーク達は休みをもらつたので、各自自由に過ごした。

助手のリースはこの地方に来たら、どうしても行きたい場所があつた。

その場所はどうしても知られたくないため、

みんなにばれないようにコツソリと診療所を抜け出した。

リースは2時間かけて目的地へ着いた。

その場所とは「絵本の館」だつた。

リースは辺りを見回して人がいないことを確認すると店に入り、目をキラキラさせながら絵本を眺めた。

リースは以前絵本を猛烈にバカにしたことがある。

「絵本が好きつて大人の人たまにいるじゃない？あれつて私どうなのかなつて思うーー！！だつて別に絵本なんて子供が読むもので何可愛い子ぶつてんのつて思っちゃうーー！！」

そうみんなの前で公言していたリースだつたが、

その2か月後あるきつかけで読んだ絵本で感動して号泣した。

それ以来絵本の虜になつたが、みんなにはそのことを言えずにいた。

ボーラフレンドのザックスにも内緒にした。

この「絵本の館」は絵本界では有名な店でここに来るなら絶対訪れたい場所だつた。

リースが絵本に夢中になつていると、ジークとオータムが店に入つてくるのが見えた。

リースは見つかると思いパニックになつた。

どこか隠れるところを必死に探すが、見つからない。

結局ソファーの下へ潜り込んだ。

ジークとオータムはそのソファー付近で絵本を探して、絵本を見つけるとそのソファーに座つた。

ええ――――この一人つきあつてんの！？

ソファーの下で焦りながらもリースは野次馬根性丸出しだった。その後も、キスとかいつた燃える展開はなかつたが、なんか一人はいいムードだつた。

み、みんなに言いふらしたい

おしゃべりなリースは凄く思つた。

だが、だが、「絵本の館」に言つたことがばれてしまつ。

その葛藤と戦つているうちに眠つてしまつた。

夕方そうじしていた店員がソファーの下を掃除しようと下をのぞくと、

そこにはリースが寝ていたので店員は腰を抜かしたところ、

絵本の館（裏話）

リースが絵本の館に行っていた時、実は裏話があつた。

ジーク達が休みをもう前日、ジークがオータムに話しかけた。

「オータム…あのさ、明日休みらしいんだけど…」

「えつ…やつたあ…！」

「あのさ…どうか遊びに行かない？」

「えつ…」

「いや、予定があるんだつたら全然いいんだけど…」

「…『絵本の館』って知つてます？」

「『絵本の館』？知らないけど…」

「じゃあ…一緒に行つてみませんか？」

「お、おう。行こうか！！」

こうして二人は絵本の館に行くことになった。

絵本の館付近にて…

二人が絵本の館の近くまで来た。
ガラス越しから中が見えた。

すると、リースが中に居た。

二人は反射的に隠れたが、オータムは隠れながらも笑っていた。
「リースは前絵本のことバカにしまくつてたんですよ。なのに、絵本にはまつたんですね。」

「そーなんだ。ちょっと行つてからかつてやるか…」

絵本の館のドアを開け、リースの方を見ると、そこには誰もいなかつた。

しかし、ソファーの下から人影が見えた。

二人は笑いをこらえながら、座りコソコソ話で話した。

「そんなにばれたくないのかな？」

「そうかもしだせんね…めぢやめぢや絵本のじと[註]定してしま
たから…」

「ちょっと可哀想な氣もするから氣づかないふりしてやるか…」

「そうですね。じゃあ、楽しみましょつか…！」

「うして一人は楽しい時間を過」した。

ノイズ

ライラ診療所での技術交流も終盤に近づいた。

診療中、ライラがジークに話しかけた。

「…実は一つお願ひがありまして。」

「なんですか?」

「…私の息子のノイズを指導してほしくて…才能はあるんですが、最近は調子に乗ってまして、」

「息子さんがいらっしゃったんですか…どうぞ連れてきてください。」

「ライラはホッとした表情をして、助手にノイズを連れてくるように頼んだ。

1時間後：

助手に両腕を捕まえられて一人の男がジークの前へ来た。

ライラはその男の頭をつかみ強引に下げさせた。

「息子のノイズと言います。」

ノイズはわめきながら言った。

「ちくしょう。だましてこんな所に連れてきやがって…俺はもうこんな所に学ぶことなんてないぞ…！」

ジークはその男を見て、軽くお辞儀をすると構わず治療を続けた。その治療を見て、ノイズは言った。

「なんだい。伝説の魔術医師と聞いたからどんなに凄い医者かと思えばこんなもんか…！」

そう言つてノイズはジークと患者の間に無理やり入つて患者を治療した。

ノイズはジークと同様の見事な治療を見せた。

ジークはその様子をしばらく見守りライラに言つた。

「見事な治療じゃないですか？特に指導することはありませんけど

■ ■ ■

「でも

そう言いかけた時、助手のリースが走ってきて言った。

「大戦争があり 50000人の患者かなたれ込んでしまつ!!」

「50000人なんて……そんな数初めてで……どうしよう……」

ジークの表情は変わりライラに言った。

「助手たちのオータム、リース、アリーをうちの魔術医師と組ませ

ますね。」「

そこでストレーナーとシーケンスアーティスト組み治療を行つた。

た。

ノイズは見事な速さで治療して行つた。

ジークはノイズの3倍の速さで治療して行つた。

助手とのコンビネーションがいいだけだ。俺だって慣れたらあれぐらい…

そう心の中で言い聞かせた。

しかし、ノイズはあることに気付いた。

ノイズに治療されている患者よりジークの患者の方が明らかに重症

だつた。

24 時間経過：

ノイズは魔力の限界が来て、どうにも魔法が使えなくなつた。

「ノイズ君。2時間ほど休みなさい。」

ジークはそう言いながら治療を続けた。

ジークはノイズの3倍の速さで治療しながら、まだまだ余裕だつた。

ノイズは打ちのめされながら仮眠についた。

結局2日で5000人の治療が終わつた。

ジーク達は3人で3000人を請け負い実力をライラ診療所に見せつけた。

帰り道

とうとう技術交流も終わり、帰る時が来た。

所長のライラに一つ頼まれたことがあった。

「ジーク先生に一つ頼みたいことがあります。息子のノイズを一人前の魔術医師にしてやつて欲しいのです。」

「うちは来る者拒まずですが……特別扱いはしませんよ？本人が諦めたらそれまでです……」

「構いません。ジーク先生の所に預けて、自分より実力が上の人たちの前で揉まれてほしいのです。」

「……わかりました。」

帰りの道で……

馬車の中で、ジークがまたもゲームを提案した。

「20の質問ゲーム！！」

みんな5000人の患者を相手にして疲れ果てている中、ジークのみ元気だった。

どうやらみんなで旅行するのが楽しみで仕方ないらしい……
すぐに、みんなが不平不満ぱっかり言つてすぐ中止になつた。
ジークがいじけていると、オータムが仕方なさそうに言つた。

「じゃあ、やりますか！！」

オータムが一言声を掛けると、みんなも仕方なさそうにやりだした。
ジークは再び元気を取り戻した。

結局、20の質問ゲームはすぐに終わつたが、話題は新しく入ったノイズに集中した。

「ノイズの趣味は？」

アリーがそう質問すると、ノイズは面倒くさそうに言つた。

「それ聞いてどうすんの？」

その言葉に馬車内がシーンとなつた。

アリーがシュンとしているので、オータムが怒つて言つた。

「ちょっとそんな言い方ないんじゃない？」

「俺は馬車内は静かに過ごしたいんだよ！！大体仕事を一緒にやるつてだけでなんでプライベートまで話さなきゃいけないんだよ！！もう放つておいてくれよ！！」

そう言つて、ノイズは毛布を頭からかぶつた。

ジークは黙つてそれを見ていたが、すぐにノイズの毛布をはぎ取つて言つた。

「駄目だ！！一緒に20の質問ゲームをやろう！！」

「嫌だつて言つてるだろ！！」

「所長の俺の命令を聞けないならライラ診療所に帰つてもいいだぞー！なんせ俺は所長だからな！！」

「…くそつ

ノイズは渋々20の質問ゲームをジークとやつた。
全然盛り上がらなかつたが…

とうとうジーク達は診療所に帰ってきた。

ロス、イリア、モズがゲッソリした顔で出迎えた。

「お帰り！－さすがに3人はつらかったよ…」

「ありがとう！－こつちは色々勉強になつたし、楽しかったよ。あと、一人紹介したい弟子がいるんだ。」

ジークはみんなを集めてノイズの自己紹介を始めた。

「ライラ診療所から来たノイズ君だ。みんなよろしく頼む。みんなが拍手したが、ノイズは何も言わずにどこかに行ってしまった。

その態度にみんな困惑した。

ジークが続けて話した。

「ちょっと…気難しいやつかもしかんがまあみんな仲良くな！」

そう言って、ジークは苦笑いをした。

かくしてノイズの診療がスタートした。

スタート当初から診療態度がめちゃくちゃ悪かつた。

ノイズはジークにいきなり怒鳴り込んできた。

「なんで俺が軽傷患者の診療からなんだよ！－重症患者治療させろよ！－」

「いきなり重症患者から治療したいのか？」

「別にできるんだからいいだろ！－あつちじや1番の実力なんだから！－」

「じゃあ…ロス先生の横で治療して。」

「…いい気になるなよ！－お前らなんて絶対に追い抜いてやるからな！－」

そう言って出ていった。

ノイズはロスの横に行き、治療を始めた。

ロスがノイズに話しかけた。

「どうだい…うちの診療所は？」

「さ・い・あ・く…！」

「そ…そつ」

口スもシュンとさせられた。

4時間後…

ノイズは治療を急いでやっていた。

スピードを意識していたので、ミスを連発した。

そのたびに口スはフォローして代わりに治療した。

これが、ノイズにとっては屈辱だった。

ライラ診療所ではノイズに逆らうものなどいなかつた。

ノイズは悔しそうに治療を続けた。

ノイズの恋

今日は、待ちに待つた給料日。

オータムがみんなに給料明細を渡した。

ノイズが給料明細を貰うと、その額に非常に驚いた。

「な、何だこの給料は！－めちゃくちゃ多いじゃねーか！－」

「フフフ…給料には自信を持っています。まあ、それだけ激務だからね…」

「弟子の俺がこの額つてことはみんなはそれ以上に多く貰つてること？」

付近にいた魔術医師たちが一斉にさーっと逃げ出した。

ノイズはもつと実力をつけて一人前になることを誓つた。

ノイズは早速町に繰り出した。

バラがそこでノイズを見つけて声を掛けた。

「おう！－お前どこ行くんだ？」

「いや、別に…金もあるし何か買おうかなと。」

「じゃあちょっと付き合え！－！」

ノイズは無理やりパブに連れて行かれた。

「まあ、バラ先生…今日も来てくださったんですね？」

パブの店員が声を掛けた。

「まあな…今日は財布もあることだし、みんな俺のおこりだ！－遠慮なくやつてくれ！－！」

パブ中のみんなから歓声が沸き、注文が殺到しました。

バラにはきれいな女性が横に2人つき、宝石などもねだられていた。

ノイズは緊張しながら座つていたが、

バラの連れだと知られるときれいな女性が1人ノイズの横に来た。

その女性はリアといった。

その女性を見た瞬間ノイズの頭の中に雷が落ちた。

ノイズの手は震え始め、リアの顔を見ることができなくなつた。リアはその態度に嫌われているかと思い、

頑張つて話しかけたがノイズがろくに返事もしないので言った。
「ごめん…私が横じや嫌よね。他の人連れてくるから…」

ノイズは慌てて言った。

「いや…！…君で…君でいいよ。」

ノイズの恋（2）

ノイズはパブの店員リアと出会つて以来、毎週そこへ通つた。

本当は毎日でもそこへ通いたかったが、バラが週に1回しか行かなかつたのでその時には絶対について行つた。

毎回行くたびにリアを指名した。

でも、緊張してろくに話すこともできなかつた。

リアもノイズの気持ちに気づいていた。

リアはさりげなく自分が凄くお金がないこと、

病気の弟がいて、この仕事をやりだしたことを言つた。

そうしたら、ノイズはチップとして凄くたくさんのお金をリアにプレゼントした。

リアはノイズが凄いお金持ちだと勘違いした。

リアはノイズにハグして喜びを表現した。

リアはお金が全然足りないこともさりげなくノイズに伝えた。

その手段は巧妙でパブのママにそのことは話させた。

ただ、ノイズはリアに全てのお金をプレゼントしてしまつた。

もう何もあげられるお金がない…

バラのおじりなので、パブに来ることは可能である。

弟子から一人前に昇格したら給料が跳ね上がるらしいことわざで聞いた。

確かに、ガラはノイズが使えないほどの金を捨てるよつに使つていた。

それからといふもの、ノイズはめちゃくちゃ頑張つた。

嫌味な性格は治らなかつたが、今まで真面目に勉強してこなかつたことを重点的に勉強し直した。

今度の魔術医師の試験にはどうしても受かりたくて、

仕事が終わった後もジークやロスに医療魔術のことを聞きた言つた。

1か月後…

「いよいよ来月だな」

ジークがロスに呟いた。

「試験がつてこと? 誰か期待できる人はいるの?」

「チャ以来一人も出てないけど、今回は一人いるよ。」

「誰?」

「ノイズかな…」

「あいつかあ。そういうえば最近凄く頑張つてるな…」

「負けん気が強い奴はいいね。ふとしたキッカケでぐいぐい実力が
のびるから。」

「誰かに貢いでるつて噂だけど…」

「いやあ…若いねえ…！」

「俺らと同い年ぐらいだけね…」

一番死にそうになつた日

イリアとジークがたまたま並んで治療していた。

イリアがジークの実力を見て驚いた。

「いつみても凄すぎますよね…ミスとかしたことあるんですか？」

... | 回路 0 |

「內緒。」

「蜘蛛の糸」の如きは、

「うーーん……あの時かな……4年前患者が一万人来た時に魔術医師は

「それ、ちょっと失礼さへ言つておきたいんだ。
俺一人、助手は8人しかいないでしょ？」

「大げさなもんか！死にそうになつたんだから！本当に…」

4
手
前

「ジーク先生！－患者が待つてますよ！－寝るな－！－！」

寝かせてください!!せいかせいかせいか無理です!!

「元メーテルせんねー！！元メーテルせんねーと何時までたこても終つうなーバカーがーーーーーかーい單くちれー！！」

「ジーグ先生が壊れたぞ！！例の奴もつてこい！！」

見
王

ジークは思い出しだけでも身震いした。

「テメーって叫んでた人はだれなんですか?」

「……言れない……言いたいが怒られるから」

「寿命が10年は縮まつたけどね

「ところで、例の奴ってなんですか？」

「恐ろしい薬…激痛と引き換えに魔力と体力を戻す。でも、想像を絶するほど痛いし、10日間は悪夢にうなされる…」

「そんな危ないもの打てる助手の人はいるんですか?」

「一人ね…」

「誰ですか?」

「言わない…おこられるもん」

バラの過去

バラはいつも浴びるのみで酒を飲んでいる。

その日もバラはパブへ行き、店の酒をすべて注文した。

3時間が経ち、5時間が経つ……

「んせい！バラ先生……起きて下せ……！」

「ん……もう朝か……」

「早くいかないと遅刻しますよ……！」

「わかつて……いてて……どうも頭が痛いな」

「飲みすぎですよ……明らかに……体壊しちゃっても知らないから」

「パブの店員が酒飲みすぎて怒るかなあ……」

「心配して言つてるんでしょう……どうせ私が介抱するはめになるんだから……」

「わかつたよ。マリ」

「俺じゃダメか？マリ」

「ダメじゃないけど……」

「ダメじゃないけどなんだ？」

「あなたは……ずっと変わらないでしょ？そんなあなたが好きよ。でも……」

「……」

「……」

「……」

「マリ……俺は決めたよ。」

「何を決めたの？」

「酒を今日で辞める。一生な。」

「えつ」

「女遊びもしない。」

「…」

「俺は人生において2番目に大切なものと3番目に大切なものを諦める。」

「…」

「そして、マリ……一番大切なお前を手に入れたいんだ」

「……何で眠ったまんまなんだ？」

「…」

「今日は俺たちの結婚式じゃないか……何で……もう一度笑ってく
れよ……」

「…」

「らせんせい！バラ先生！…」

「バブのママに起こされた。」

「こんな所で寝てないであつちで飲みまじょひー。」

「ああ……そうだな……」

「どんな夢見たの？笑つたり泣いたりしてたけど……」

「……なんでもない」

外国語を学ぼう

「ジーク先生、何やつてるんですか？」

「サクロウ。」

「何言つてるんですか？」

「バカだなー オータムは。アステカ語で、勉強つて意味だよ。」

「ば… そんなのわかるわけないじゃないですか！！！」

「まあ、そうだな。実は患者の勧めで外国語を勉強しててね。」

「どうとうそこまで来ましたか…」

「は？」

「人は暇になると外国語を勉強するんですよ…」

「ち、違うよ… 全国にいる外国語を勉強している人に謝れ…！」

「問答無用！！ 患者数増やしますから…！」

「そ、そんなー」

オータムの厳しい言葉はあつたが、ジークは結構頑張つてアステカ語を勉強した。

1日1時間は勉強して、休日の1日は4時間勉強して家庭教師までつけた。

ジークの話では、なんでもいいから医療魔術以外のことを勉強したかつたらしい。

1か月後…

ちょうど、アステカ人の患者がやつて來た。

オータムはちょうど良いと思いジークにその患者を診させた。

患者はアステカ語しか話せないようでこう話した。

「ハトラエ タラサフィ」

ジークは緊張しながら言つた。

「ハトラエ タラサフィ」

患者はアステカ語がわかると思ったのか早口で話した。

「フトイルヨイン ジャンガブ リヨウイジクオモンテガル」
ジークは全く聞き取れなかつた。

しかし、オータムはジークがアステカ語を話せると思つていて
かつこ悪いところは見せたくなかつた。

オータムはジークに尋ねた。

「何て言つてるんですか？」

「その… お金がないんだけれど、どうしたらいいのかつていつてるん
だ…けど」

「分割ならいいって言つて下さい。」

「わ、わかつた。ガタラジウンイ」

「ハツリュウジノ！ フジンンガ！」

「ハ、アハウヨインジョコモジュ！」

オータムは再度ジークに聞いた。

「解決しましたか？」

「うん… な、なんとかな。」

本当は意味のない単語を言つていただけだつた。

とりあえず、ジークは患者を治して受付にお金を払つて患者を早々
に帰らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367n/>

魔術医師 ジーク

2010年11月3日06時30分発行